

第5回

久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

もくじ

▽	ごあいさつ	▽	玖珠町長 宿利 政和		3
---	-------	---	------------	-------	---

▽	玖珠町教育委員会 教育長	▽	梶原 敏明		4
---	--------------	---	-------	-------	---

▽	久留島武彦記念館 館長	▽	金 成妍		6
---	-------------	---	------	-------	---

▽	選考講評	▽	子どもの未来社 編集長 堀切 リエ		8
---	------	---	-------------------	-------	---

小学生の部

▽	 大 賞	▽	はずかしがりやのくまお		20
---	---	---	-------------	-------	----

▽	 佳 作	▽	シマシマしゃぶしゃぶ		23
---	---	---	------------	-------	----

▽	サーフイーの止まった時計	▽	土佐路 美優		25
---	--------------	---	--------	-------	----

▽	選考委員特別賞	▽	少女りなと玉のぼうけん		29
---	---------	---	-------------	-------	----

▽	久留島武彦記念館 館長特別賞	▽	めいの日記		31
---	----------------	---	-------	-------	----

▽	読売新聞社賞	▽	私とお猿さん?		36
---	--------	---	---------	-------	----

中学生の部



大賞



鏡の魔法は美女を救えるのだろうか

秋好 彩音 ……

40



佳作



くもいろ

寶珠 咲羽 ……

………

51

選考委員特別賞



満月の夜

宿利 英美里 ……

………

54

読売新聞社賞



桃太郎の代で鬼を倒せなかった話

毛利 太河 ……

57

高校生の部



大賞



サニ－のスケッチブック

岸本 ひかり ……

68



佳作



ぼくらのはなし

宿利 美湖 ……

73



たぬきのためたぬ
森 海翔 ……

87

選考委員特別賞



鳥になって
原 菜々子 ……

91

久留島武彦記念館
館長特別賞



ホース
荒川 智哉 ……

94

読売新聞社賞



ラッキーとぼく
清水 由愛 ……

106

【ごあいさつ】

「第5回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町長

宿利 しゅくり
政和 まさかず

第5回久留島武彦童話賞子ども創作童話コンクールで受賞されました皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。さて、このコンクールは日本のアンデルセン・久留島武彦先生の生誕145周年を記念して始まったコンクールで、童話をとおして児童教育を実践した久留島先生の精神を受け継ぎ、児童文学の一層の発展を願って創設したものであります。第5回目を迎える今回は、小学生の部7編、中学生の部4編、高校生の部220編の合計231編の作品が寄せられました。回を重ねるごとに応募作品も増え、入選された作品はもちろん、いずれの作品も独創的で感受性に富み、まさに、久留島先生が掲げた童話の三大要素「興味」、「夢」、「教え」がたくさんつまつた素晴らしい作品の数々でした。玖珠町は「自然を愛し 子どもとともに 夢を育み 誇りを持てる 心のふるさと 玖珠」を基本理念に、まちづくりを進めております。今後久留島武彦の精神を継承していくことが子どもたちの未来を育むと信じております。むすびに、選考にあたりご尽力いただいた選考委員をはじめ、多忙な中、応募を取りまとめたいただいた学校関係者の皆様、当コンクールにご協力いただいた全ての関係者に厚くお礼申し上げますとともに、このコンクールに応募してくれた子どもたちの中から、将来の「久留島武彦」が生まれることを、心から期待しております。

【ごあいさつ】

「第5回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町教育委員会 教育長

梶原 かじわら
敏明 としあき

「第5回久留島武彦童話賞 子ども創作童話コンクール」において受賞された皆様、そして、御家族の方々、この度の受賞、誠にありがとうございます。心よりお喜び申し上げます。

さて、今回の皆さんの受賞作品では、「人としてどう生きていくべきか」という社会で生きていくための重要なヒントが込められています。

作品の特徴として、物語の中で動物を主人公に置き換え、ファンタジーとして、人としてのモラルや社会性などの人格形成に必要な「教訓」が描かれており、久留島武彦先生の教えで「童話は人生最初の哲学書」とありますが、それが作品の特徴として表れていることがわかります。

子どもたちは、童話を創作する中で、人が人として共に生きていく上で必要な「教え」を自ら考え、童話を通じて描くことで、自分自身の社会人に向けての生き方のアピールと捉えた次第です。

このように、創作の世界に広がっている皆さんの作品を通じて、「童話」が持つ未来に向けての大きな力を実感しました。

また、「やさしさ」や「思いやり」など、自己肯定感を築いたり、社会性を高めたりするのに童話は重

要な役割を果たしていると、新たな発見的感動を覚えました。

「久留島武彦童話賞 子ども創作童話コンクール」は、今年で第5回目を迎え、この賞を継続することができたのも、選考委員の皆様をはじめ、応募を取りまとめたいただいた学校関係者の皆様方の御理解、御支援をいただいているおかげであり、そして、何より、児童生徒の皆さんからの応募があったからこそと、心より感謝申し上げる次第です。

「多くの皆様方に、『温かみのある心のふれあい』を届けたい」という願いで、本日の受賞作品を一冊の作品集に収録します。

最後になりますが、御応募いただいた皆様、選考委員の皆様、応募に御協力いただいた学校関係者の皆様方の御健勝と、今後の益々ご活躍を御祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【ごあいさつ】

「第5回久留島武彦童話賞 ―子ども創作童話コンクール―」によせて

久留島武彦記念館 館長 キム 金 ソンヨン 成妍

この度は「第5回久留島武彦童話賞 ―子ども創作童話コンクール―」にご応募いただいた231名の皆様、誠にありがとうございます。そして、受賞された16名の皆様、ご家族、学校関係者の皆様、おめでとうございます。

久留島武彦記念館の横にある国指定名勝旧久留島氏庭園には、日本一大きな童話碑があります。久留島先生の童話活動50年を顕彰して建てられたものです。童話碑の除幕式が行われた昭和25年（1950）5月5日、久留島先生は童話碑の前に立ち、次のような言葉を述べられました。

「この童話碑は、玖珠町に生まれた私が、子どもたちに童話を語り始めた記念の一里塚です。この地を起点にして、童話を書いたり話したりする人が、日本中にたくさん出てきてほしいと願っております。」

久留島先生のこの思いを継承するために創設されたのが「久留島武彦童話賞」です。このコンクールがきっかけとなって「童話を創ってみよう」と思い立ち、自分の中で一つの世界を創り上げ、それを表現するために「書く」という行動を起こし、それを最後まで「書き切る」子どもが、今年も231名もいたことを、心から嬉しく思っております。去年に続き今年も、小学生の部と高校生の部に、東京をは

じめ、大阪、広島、和歌山、愛知などから面白い作品がたくさん届きました。少しずつではありますが年々応募作が増えていることに、希望を感じております。毎年創作童話コンクールにチャレンジする子どもが一人でも増えていくれば、久留島武彦記念館としてはこれ以上嬉しいことはありません。

ご多忙にもかかわらず、コンクール実施に当たりご尽力いただきました皆様に心からお礼を申し上げます。来年も夢あふれる皆様の作品に会えることを楽しみにしております。

【ごあいさつ・選考講評】

子どもの未来社 編集長 堀切 ほりきり リエ

「久留島武彦童話賞子ども創作童話コンクール」も第5回を迎え、全国から231作品もの応募があり、とくに今回は高校生の部に多くの力作が寄せられました。童話を創作してみようと思い立ち、作品を考え、書き、仕上げ、応募してくださった皆さんに、まずは大きな拍手を送りたいと思います。

一つの作品を仕上げるまでには、自身との様々な対話があったことでしょう。それがあなたにとって大きな宝物となったことはまちがいありません。今回惜しくも授賞を逃した皆さんも同じです。

また、誰かの作品を読むのは勉強になるものです。応募作品を読みながら、私も楽しい想像をしたり、場面を思い描いたり、大切なことを考えさせられました。皆さんにも今回の受賞作をぜひ読んでいただきしたいと思います。

子どもたちが生きていく上で大事なことを、楽しい童話作品にこめて書かれた久留島武彦先生にも、きつとたくさんのお話からお話を学ばれる時間があつたことでしよう。皆さんもいろいろな作品を読んで、創作の勉強を楽しく続けていってください。

選考講評は以下の通りです。皆さんのこれからの創作のヒントとなるようなことを中心に書かせていただきます。

小学生の部 大賞 『はずかしがりやのくまお』

書きたいこともお話の構成もよくできていて、完成度の高い作品です。内容もよかったです。はずかしがりやのくまおが、友だちの悩みの相談にのって解決をしますが、答えを出すというより、友だちの話を聞いて考え、アドバイスしていくのです。案外、みんなが相談をしたいと思うのはこんな人ではないかなと思えました。くまおはえらぶったりせず、友だちと対等に会話をします。

話をするのが苦手なくまおでしたが、へびには「たまには回り道をしたら」、ぞうには「大きくなったら強くなれるよ」などの確なアドバイスをします。

最後におしゃべりの楽しさを知ったくまおが、今度は自分から話しかけてみようかな、と思うのもいい終わり方ですね。

小学生の部 佳作 『シマシマしゃぶしゃぶ』

「シマシマしゃぶしゃぶ」という鳥を創造したことがすばらしいと思いました。どこにもいない鳥ですから、どんな鳥なのか、作者は一から作っていかねばなりません。

この鳥は、温泉がわりに鍋につかる絶滅危惧種ですが、つかったお汁は飲んではいけないのです。この設定はおもしろいのですが、ではなぜ、つかったお汁を飲んではいけないのでしょうか？ 飲んだ人は突然、警察に自首することになってしまいます。そこをちゃんと理由付けしておくと思ったと思います。

ます。「魔法の動物図鑑」には他にどんな動物が載っているのでしょうか。お話がどんどんできそうで楽しみですね。

小学生の部 佳作 『サーフィンの止まった時計』

水色の髪で西洋の女の子のセノ、不思議な少年、竜、カラクリ時計が出てくるので、ゲームやアニメの世界に近い想像の世界を感じました。ふんわりとやさしい雰囲気の商品です。

お話の中で大事なアイテムのカラクリ時計がどんなものかを書くときよかったです。カラクリがどんな形か、なぜお兄さんが作ってくれたのか、そして、サーフィンはなぜ人間になってカラクリ時計を直してきたのか。不思議な世界を描くには案外いろいろな設定が必要なのです。あなたの好きな作品の設定を、創作者の目で読みなおして研究してみたらどうでしょうか。

小学生の部 選考委員特別賞 『少女りなと玉のぼうけん』

りなが、ネコの玉といっしょに冒険の旅にでます。冒険はいつもわくわくするものです。このお話は「夢だった」という終わり方なので、いつのまにか不思議な場所に行ったり、どこへ行くかわからなかったり、それもありにしたのだと思います。でも、あなただけの不思議な世界を描く時は、そこがどんなところか、どうやってそこへいったのかなど、なるべくはっきり書いたほうが、読者がお話を理解

しやすくなります。

また、あなたはどんな冒険を試みたかったのか、なぜネコの玉といっしょにでかけたのかなどをも一度考えてみると、冒険がもっとおもしろくなると思いました。

小学生の部 久留島武彦記念館 館長特別賞 『めいの日記』

独創的なお話が書ける人だと思いました。わたしは、友だちのめいの日記を読んで、めいがかっぱと友だちになったことを知ります。かっぱのみどりさんは、村が火事になって逃げてきたのに、あと3日しか生きられないとわかり、さらに人間に変身してしまい、「しりこだま」によって生き返り、めいとはもう遊べなくなります。

お話としておもしろい要素がたくさん入っているので、3人の関係性とストーリー展開を整理したらよい作品になると思いました。たとえば、わたしは、この頃めいがか何か隠しているような気がして、こっそり日記を読んでしまうという動機（きっかけ）を入れるとか……。タイトルにもなっているのに、めいが最後まで出てこなかったのが残念です。

小学生の部 読売新聞社賞 『私とお猿さん？』

猿が人間の言葉を話せる世界なので、たとえば最初に先生が、「最近、ニュースで人間の言葉を話す猿

が発見されました」と書けば、それだけでお話の世界へ入っていただけます。また、なぜその猿が人間の言葉を話せるようになったかを書けば、それだけで物語ができますね。「猿の惑星」という映画を観たことがありますか？私はあの映画を思い出しました。お話が多分途中と思われるところで終わってしまったんです。最初にあった猿は子どもで、まだ森へは帰っていないということですか？ぜひまたこの続きを書いてみてくださいね。

中学生の部 大賞 『鏡の魔法は美女を救えるのだろうか』

まず、よく最後まで書ききったと感心しました。鏡から見たお話の世界を描くという点で通して統一性もあります。読んでいて、私はデイズニーアニメのアラビアンナイトに登場するジーニーをイメージしました。会話にリズムがあるので、マンガやアニメのしなやかな動きを彷彿とさせました。ただ、鏡の一人称語りで物語を追っていくと、視点が一つなので、どうしても説明がくどくなったり、無理がでてきたりしますから、そこを工夫するともっとよくなります。これだけ筆力があるので、次回からは別の物語を題材に挑戦してみてください。

視点をかえて既存の物語を語るのには、物語を書くのにもいい勉強になります。どんどん書いてみてください。

中学生の部 佳作 『くもいろ』

雲の色で自分の行いがわかるようになる、というお話です。導人として、おばあさんを助けて魔法のアメをもらおうという、お話の構成がちゃんと考えられているのがよいと思いました。

ただ、雲の色と行動との関係がありきたりなのをもったいいです。たとえば、自分がよかれと思ってやったことがそうではない結果を招くというような、意外な例を入れれば、主人公にも読者にも発見や考えてもらいたい点が示せます。きれいな色になると思っていたのに雲が予想外の色になったとしたら…。意外な例には、きつと心の不思議も隠れていると思います。

中学生の部 選考委員特別賞 『満月の夜』

ウサギとオオカミとライオンとタヌキが友だちという、にぎやかで楽しいお話です。この友だちが会えるのは、月に一度の満月の日。でもオオカミは満月がきらい。この理由は書かれていないのですが、オオカミ男からの連想でしょうか。もし、動物たちが助け合って生きるすばらしさを描きたいのであれば、オオカミが満月をきらう理由も書いて、解決方法も満月を隠すというその場しのぎではなく、みんなで作えあい、知恵を出し合って解決する方法を見つけるのがよいと思います。

個性豊かな登場人物がそろっているので、お話の設定とお話の舞台をもう一度考えてみてください。

中学生の部 読売新聞社賞 『桃太郎の代で鬼を倒せなかった話』

全体的に文章に勢いがあるのがよいと思いました。よく書ききりました。鬼の派閥争いや、実は桃太郎が命からがら逃げてきて、心を病んでしまったという設定もおもしろいです。祖父の代、父の代でなしとげられなかったことを孫の代でどう克服していくのか、大河ドラマのように壮大な物語ですから、もう一度話の構成を整理してみてください。材料はでそろっているので、物語のテーマをはっきりさせて書き直すとうよくなると思います。たとえばテーマは、「正義の戦いに勝者はいない」なのか、「桃太郎一族は何と戦ってきたのか」なのか…。最後の、「これから大勢の命を奪う存在なのだから殺してもよい」という考えには、私は「？」がつかまりました。

高校生の部 大賞 『サニীরスケッチブック』

動物園で故郷を思うゾウのサニীর、スケッチブックに絵を描いていきます。だれでも心が沈むときは、なんらかの手法でそれを表現できると心が明るくなれますよね。そんなことをうまくお話にとり入れて、やさしい作品に仕上がったと思います。サニীর絵を描いているところも楽しそうでいいですね。ただ、動物園の動物が故郷に憧れているかと言うと、現在、多くの動物は動物園で生まれるのだそうです。故郷に憧れる動物というのは、ある種の思い込みかもしれません。もう一度動物園の動物を見直してみると、また別のお話が生まれるかもしれませんね。

高校生の部 佳作 『ぼくらのはなし』

構成もしっかり考えられていて、文章力もあり、最期まで読ませる力のある作品です。字もきれいで、漢字の使い方にも感心しました。おじいさんの存在を伏線にして、最後に登場させるところなど構成もよく考えられています。

ただ、惜しいのは発想の独創性が足りないことで、お話の先が読めてしまいます。ここまで書けるのですから、次回はぜひ、思いきった発想を物語にとりいれてみてください。物語の構成が崩れるように思うかもしれませんが、そこから物語はおもしろくなるはずですよ。あなたの力ももっと発揮されるはずです。タイトルもお話の魅力を引き出すものを考えてくださいね。

高校生の部 佳作 『たぬきのたぬたぬ』

たぬきのたぬたぬが、人間の村で信頼を得て暮らすまでの話が、しっかり構成されていて、物語としてよくできていると思いました。でも、たぬきの村より人間のほうが「さまざまな文化を形成して」いてすばらしい、とはどういうことでしょうか。ほんとうに人間のほうがすばらしいのでしょうか。なぜ、たぬたぬは人間の村に憧れて、正体がばれては逃げることをくり返しても人間と信頼を築くことにこだわるのでしょうか。人間を上、たぬきを下、と考えるのではなく、たぬきと人間を文化の違う対等な者同士として、その間の信頼の物語として書いてみたらどうでしょうか。

高校生の部 選考委員特別賞 『鳥になって』

文章が上手な人だと思いました。ただ惜しいのは、カナムくんの存在がよくわからないことでした。なぜみんなの夢の種をあつめて「夢語りの国」をつくったのでしょうか？ 例えばよくある話ですが、カナムくんが自分の夢をかなえる前に亡くなった子だという理由づけもあるでしょう。カナムくんの設定はこの話に大切なので、そこをしっかりとさせると、もっと深みのある話になったと思います。

また、「鳥になって空を飛びたい」という夢にもっと独創性があつたら、お話もちがった結末になったと思います。

高校生の部 久留島武彦記念館 館長特別賞 『ホース』

砂ぼこりの中、黒いホースを荷車で運んでいるクマは水の使者。クマのアップからの始まりは映画のように惹きつけられました。人間の残した住居を利用して動物たちが住んでいる世界の、ここはインパラの国。水を届けにきた秘密を抱く暗い影を感じさせるクマ……。謎を謎として残していく物語展開が上手ですね。水や食糧のない世界の暗さが現在にも重なる近未来として描かれていて、描写力もあります。

ただ、タイトルにもなっているホースの使い方が今ひとつわかりませんでした。また、そもそも肉食動物（雑食動物）であるクマが草食動物を食べるのは食物連鎖ですから、そんなに苦悩が必要でしょうか？ とはいえ、物語の最後で去っていくクマを読者に見送らせる描写力はたいしたものだと感心しま

した。

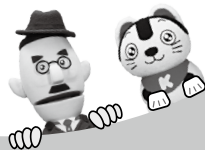
高校生の部 読売新聞社賞 『ラッキーとぼく』

ぼくが生まれてから、犬のラッキーと過ごした日々を順に追っていき、最期まで丁寧によく書いています。文章もたいへん読みやすく、犬の様子 of 描写もうまいです。素直な文章に好感をもちました。

ただ、主人公に新しい家族ができるところで終わるのは予想内でしたし、一人暮らしで家を出ていくタイミングで犬が亡くなることも、作者のあなたにはいろんな選択肢があつたはずで、犬を人生の道連れとして生きること何を描きたかつたのか、もう一度考えてみてください。そうするとお話に深さやリズムがでてくると思います。



【小学生の部】





【大賞】

はずかしがりやのくまお

茨木市立茨木小学校 4年

えいあんじ
永安寺 翔

しずかな森のおく深く。くまのくまおがすんでいました。くまおの好物はくり。くりがあるといついつい食べすぎてしまいます。くまおは、はずかしがりやでお話するのが苦手。だけど、本当はほかの動物たちと話したいと思っていました。

ある日、くまおがくりひろいに行くと、木の上からへびくんが話しかけてきました。

「やあ、くまおくん、こんにちは。ぼくのなやみを聞いてくれるかい？」

くまおがもじもじしていると、へびくんが、「細くなるにはどうすればいいかな？」

と、話し始めました。

「うーん。」

くまおは、こまってしまった。

「どうして細くなりたいの？」

「細い道を通ろうとした時に、体が太くて通れなかったからだよ。」

「へびくんでも通れない道があるんだね。でもこれ以上細くなったら、大きい物が食べられなくなるよ。ぼくはくりが食べられなくなったらおなかへって、少しイライラしちゃうな。」

「なるほど。好きなものが食べられないなんて、そんなのいやだな。」

「細い道を通らなくても、たまにはまわり道するのでもいいんじゃないかな。」

「ありがとう。そうかもしれないね。」

そう言うと、へびくんは帰っていききました。

くまおが歩き始めると、子ぞうが話しかけてき

ました。

「くまおくん、こんにちは。今、なやみがあるから聞いてくれる？」

くまおがまたもじもじしていると、子ぞうが、

「強くなるにはどうすればいいかな？」
と話し始めました。

「うーん。」

くまおは、こまってしまいました。

「どうして強くなりたいの？」

「お父さんやお母さんみたいに強くなりたいんだ。」

「それなら、いっぱい食べたらどうだい？」

「もういっぱい食べてるけど、なかなか強くないんだ。」

「そうか。でも、そのうち、大人になったらぞうくんは強くなるだろうから、今しかできないことをするのも大事だよ。」

「なるほど。そうかもしれないね。」

そう言うのと、ぞうくんは帰っていききました。

ふたたびくまおが歩き始めると、きりんが話しかけてきました。

「くまおくん、こんにちは。今、なやみがあるから、くまおくんにそうだんしていい？」

くまおがまたまたもじもじしていると、きりんが、

「首を長くするにはどうすればいいかな？」
と、話し始めました。

「うーん。」

くまおは、こまってしまいました。

「どうして首を長くしたいの？」

「ぼくの大好物のこい緑色の葉っぱが高い木の上のてっぺんにあって、この首では届かないんだ。」

「それなら、せのびしたらどうだい？」

「それでは届かないよ。」

「じゃあ、二本足で立って見たら？」

「それなら届きそう。でも立っていられる自信がないなあ。」

「そうか。そう言えば、この前、きりんくんが好きなこい緑色の葉っぱをこの近くで見たよ。もう一度このあたりを探してみたらどうだい。あんがい近くにあるかもしれないよ。」

「わかった。じゃあ探してみるよ。」

そう言うと、きりんくんは帰っていききました。

くまおは、くりひろいを始めました。

「おしゃべりするのも楽しいな。次からはぼくから話しかけてみようかな。」

その後、なやみを話した動物たちは、森のみんなにくまおが相談にのってくれたことを話しました。それを聞いた動物たちは、なやみがあると、くまおに相談するようになりました。時には、くまおも自分のなやみを聞いてもらおうそうです。は

ずかしいという気持ちはどこへいったんでしょうか。



【佳作】

シマシマしゃぶしゃぶ

九重町立東飯田小学校 4年

小野 おの
心美 このみ

お母さんに今日のご飯を聞いたたら、

「今日はしゃぶしゃぶよ。」

と言いました。わたしはしゃぶしゃぶが大好きなので、楽しみにしていました。そして夜ご飯のじゅんぴができて、「いただきますーすー」食べようとしたときに、小さな鳥がしゃぶしゃぶに入っていました。気になって、魔法の動物図鑑で調べました。この鳥の名前はシマシマしゃぶしゃぶと言うそうです。この鳥は、近くにあるおなべにやってきて、温泉代わりに使うそうです。絶滅危惧種で、シマシマしゃぶしゃぶが使っていたお汁は、飲ん

ではいけないそうです。

「ど、どうしよう…」

焦ってそのページを隅から隅まで全部の文章を読んでみると、「対処法」とあったので急いで読みますと、

「しゃぶしゃぶの具材を入れておもてなしをする。」

とありました。早速、エノキを一個入れると「パクパク」と食べてしまいました。次に、シャツキリレタスを入れました。またもや、「シャキシャキ」食べてしまいました。するとシマシマしゃぶしゃぶは頭に小さなハンカチを乗せました。「これはうれしい時にしかしない行動」と図鑑にありました。私はうれしくて、頭の回転が速くなりました。「シマシマしゃぶしゃぶは気に入ったお汁からしばらく出てこないはず！」

もう一個おなべを用意して食べようと思い、早速

準備しました。グツグツ煮えて「さあ、食べよう！」
と思ったら、

「パタパタッ　ちゃぽん。」

おなべの中に小さなハンカチを頭の上に乗せた
シマシマしゃぶしゃぶが入ってきました。ハツと
思い図鑑を見ると、『小さなハンカチを乗せた
きは嬉しいときにする行動。』とありました。私は
びっくりしました。

私たちは炊飯器が目に入りました。今から、ご
飯を炊こうと思いましたが、家族全員そんな気力
はなく、仕方なくお汁を飲んでしまいました。そ
してお汁を飲んでしまったことを自首して警察
に話に行きました。警察からは、

「次は飲まないようにしてください。また飲んで
しまった場合は、また自首してください。」

と力強く言われました。家族で「はい…」と反省
しながらトボトボと帰りました。

私が思うことは、

「二度とシマシマしゃぶしゃぶが来ませんよう
に。」

と、願うばかりでした。



【佳作】

サーフィ어의止まった時計

玫瑰町立塚脇小学校 6年

土佐路 美優
とさじ みゆ

ある西洋の時計屋で、セノという水色の髪色をした女の子が働いていました。セノは、西洋でも有名な時計屋で働いているのでお店にはいつも、お客さんが来ます。ところが、青葉が生い茂る夏の日、不思議なお客さんが来たのです。

「こんにちは。今、空いてるかな？」

青色の髪に緑色の瞳の少年です。セノは、不思議な瞳だなあと思いつながら答えます。

「はい。空いてますよ。」

それを聞いた少年は、息を吐きます。

「よかった。時計が止まって困っていたんだ

よ。」

「時計が止まったんですか？そんなら修理しましょう。」

セノは、得意そうに言います。そして少年に問いました。

「名前はなんですか？」

「サーフィー」

サーフィーは答えました。

「サーフィーさんですね。時計はしばらく預かりますので、時計を見せてください。」

「はい。これ。」

セノは、時計を見たとき驚きました。木で作られた時計で、中にはカラクリがあるのです。

「こ、これって……」

「うん。カラクリ時計だよ。」

サーフィーは、静かに言います。

「兄ちゃんが作ってくれたんだ。今は、東洋に行

「っちゃったんだけどね。」

セノは、もつと驚きました。手作りであんなカラクリ時計を作るのは、むずかしいからです。

「す、すごいわ。すばらしい。」

「私でもこんなのは作れない。」

サーフィーも共感しました。

「すごいよね。プロみたいなんだよ。」

セノも共感しながら言います。

「そうよね。でも、どこから直せば良いのか分からないわ。」

手作りなら、なおさら手が付けにくいので、セノも困るのです。そこでサーフィーが言いました。

「兄ちゃんに聞いてみたら分かるかもしれない。」

確かにサーフィーのお兄さんが作ったのならお兄さんには止まってしまった原因がわかるかもしれないからです。

「それは良い案だわ。そのお兄さんに聞いてみて

くれるかしら？」

「うん。分かった。電話で聞いてみるよ。」

そういうとサーフィーは外へ行きました。

（本当に不思議な子ね。お兄さんも何者なのかしら。）

セノは、サーフィーを待っている間に考えていました。そして時計を見つめました。時計は止まったままカラクリも全て動きません。

ですが気がつくのと、時計からシューという音がしたので、それにセノはドキッとしましたが、カラクリが動いているのを見て安心しました。

「良かった。動き出したわ。」

セノは、カラクリ時計を持つと、サーフィーに直ったことを伝えるため、外へ行きました。するとサーフィーが丁度よく店の前にいました。

「時計直ったわよ。」

セノが言いました。

「本当？兄ちゃんもしばらくしたら直るだろうって言ってたけど。」

サーフィーのお兄さんも直ると言っていたようです。セノは時計を渡して言いました。

「お金はいらないわ。この時計もまだきれいだし大事にしてね。」

「うん！分かった。色々ありがとうね。」

サーフィーはお礼を言うとお帰って行きました。

その日の夜、セノがお店から出ようとしていると、青い花びらのようなものが沢山落ちています。よく見てみると、キラキラと光っています。

「きれい……」

思わずセノは、そう呟いてしまいました。しばらく、その花びらのようなものを見つめていると、上から青いなにかが落ちてきます。

「何あれ？」

セノは、こちらに向って落ちてくる何かを目を細

めて見ました。

「竜？」

そう。竜です。青い竜は、セノに気がついたのかこちらへ来ます。

「グオオオオオ。」

竜はセノの前へ来て声を上げました。

「私のこと食べるかと思ったわ。」

「おとなしいわね。」

セノが竜にふれると竜は言いました。

「君は、僕をいじめないんだね。」

「その話し方は、サーフィー？」

竜の顔をよく見ると、緑色の瞳に青色の鱗。サーフィーの見た目と似ています。

「うん。そうだよ。よく気がついたね。」

まさかサーフィーが竜だなんて考えもしなかったセノは、声も出ないほどビックリしました。サーフィーは、続けて話をします。

「僕を見た人々は、全員言うんだ。人外だとか化け物だとか。」

「確かに、僕は竜だけど人を食べてなんかいい。ただ森で静かに生きているだけ。」

「なのに、みんな僕をいじめるんだ。」

サーフィーは涙を流しました。見た目などで差別され、今まで誰も信じてくれなかったのです。

「いじめないのは、セノと兄ちゃんくらいだよ。」

サーフィーがそう言うときセノはこう言いました。

「今までがんばってきてえらいわ。」

「私なら、たえられないもの。」

「本当にえらい。」

セノは、サーフィーを抱きしめました。

「へ？」

サーフィーは、わけも分からず涙が出るものから目をパチクリと動かすことしかできません。悲しいのか、それとも嬉しいのか？サーフィーに

は分かりませんでした。だけど心に火を灯したかのように、心が温かくなるのを感じました。

「ありがとう。」

泣き疲れたサーフィーは、セノに抱きしめられたまま眠ってしまいました。そしてセノもサーフィーを抱きしめたまま眠ってしまったのでした。

【選考委員特別賞】

少女りなと玉のぼうけん

世田谷区立塚戸小学校 3年

高木 香那
たかぎ かな

あるところになりなという少女がいました。りなはねこをかっていて、名前は玉です。

ある日学校から帰ってくると、自分の部屋にいつてしゆくだいはじめました。でもすぐにいやになって、ねこの玉と遊びはじめました。しゆくだいをやる時間は長く感じるのに、玉と遊ぶ時間は早く感じました。

夕方になりました。さすがにしゆくだいをやらなければいけないと思ったりなは、しゆくだいを始めました。そしてやつとしゆくだいが終わったりは玉をつれて、一階へおりようとした時ある

ことに気がつきました。ドアに紙がはってあったのです。その紙には「たから島の地図」とかいてありました。

「たから島の地図？」

りなはつぶやきました。りなはいつのまにかドアをあけていました。ドアをあけると、まぶしい光にすいこまれました。

目をあげると、そこはさばくのような場所でした。下を見ると玉もいます。りなはどこか分からなくて、とりあえず前にすすみだしました。しばらく歩いてりなは手に地図をもっていることに気づきました。そしてここがたから島ということが分かりました。たくさん歩いてつかれたので、りなと玉はすわりこみました。下を見るときょうりゅうが今にでも動き出しそうです。りなと玉はあわててにげだしました。

「あぶなかった。」

と、りなはため息をつきました。ですがすぐ、さ

っきのきょうりゅうは化石ということに気づきました。りなは玉をかかえながら、

「心ぞうにわるいわ。」

といいました。また少し歩くとピラミッドみたいなテントがありました。中で休もうとすると、次はへびがでてきました。りなと玉はびっくり。りなが玉をかかえてはしります。でもへびは思ったより足が速いです。しばらくにげると川がありました。橋はありません。もうだめだと思った時、たかとびぼうが落ちていました。りなはたかとびぼうを上手に使い、にげだしました。後ろを見るとへびはもういません。テントの中をかくにんすればよかったと、りなは思いました。そして、

「次は本当にあぶなかった。」

とつぶやきました。そしてまたまた前にすすみだしました。

次はトンネルがありました。トンネルはとても長く、暗いです。りなは何かあるかもしれないと

思いトンネルに入ってみました。

トンネルは思った以上に暗くて長いです。それでもりなは後ろにさがりません。その先がどうしても気になったからです。玉もちゃんといっています。しばらく歩くと光がおくに見えました。「もうすぐだ。」

りなと玉は走ってトンネルをでました。

トンネルからでると目の前にはたからばこ。

りなと玉はとびはねておよろこび。そしてたからばこをあけました。するとまたまたまぶしい光に、すいこまれました。

目をあけるとベットの。となりには玉がびっくりしたかおでみえています。

なんとこのぼうけんはゆめだったのです。玉は「今のは何？」みたいなかおをしていたので同じゆめを見ていたのかもしれないとりなは思いました。

【久留島武彦記念館 館長特別賞】

めいの日記

かつらぎ町立渋田小学校 2年

にしがき
西垣 芽伊子

こんにちは、わたしはこころといいます。

わたしは、ある日めいというこの家に行きました。
10ふんご、めいの家につくとわたしはあつくな
りました。

なぜならきょうは夏休みあけだからです。

そしてわたしは、あまりのあつさでのどがかわ
いたのでわたしは、めいに水をたのみました。め
いをまっぺしているとつくえの上に日記が置いてあ
りました。

そしてわたしは、その日記がきになってよみま
した。するとその日記は、夏休みにあったことが

書いてありました。

ますます、その日記がきになりだしたわたしは、
日記をよみました。

「夏休み1日目 わたしは、しゅくだいをしまし
た。しゅくだいをしているとあつくなったのでわ
たしは、川へすずみに行きました。川につくとかわ
べでかっぱがたおれていました。わたしは、と
てもびっくりしましたが、かっぱをわたしのへや
のベッドにねかせました。すう分ごかっぱがおき
ました。そしてわたしは『おきてすぐですが、』と
いい、じこしょうかいをしました。

わたしは、西垣めい 20さい。レストランではた
らいてるんだ。『そうだ、せっかくだし capp さん
もじこしょうかいして。』『うん。わ…わたしは、
名前がない500万さい。あとわたしは、女だよ。』
『へーえ。あとあなた名前がないならわたしがつ
けてあげる。えーとえーとそうだ、あなたの名前

は、みどりよ。』『いい名だね。』『でしょ。』

「夏休み2日目 みどりにはぎもんしかないけど、一ばん気になったのは、かわべでたおれていたことです。みどりは、すこしかなしそうにこういいました。『むかしはこころへんは、いーっぱいかったがすんでいたんだ。そしてわたしがうまれ2か月でかっぱ村ていうのができて、村のそんなちようが村ができてうれしかったらしくて、そんな火が森にうつって村がかじになったの。わたしは、うんよくいきのこったんだ。』と、みどりはいいました。そんなはなしもしたけどわたしとみどりはねることにしました。」

「夏休み3日目 さいきんみどりがはやおきをしてなにかしているように思うのです。そしてあさごはんがはじまるころ、びしょびしょでかえってくるので、わたしはみどりのことがしんぱいで

す。」

「夏休み4日目 みどりとプールに行きました。みどりは、かっぱだけあって10メートルを3びようでつくんだもの。」

「夏休み6日目 わたしとみどりは、かいものに行きました。わがしやにつくと、みどりがきれいなビー玉をみつけたんです。そしてみどりがいいました。このビー玉をともだちのしるしとして、もっておくことにしました。」

『みどりあしたは、おんせんやどの【ゆ、はいつてくかい】に行くからはやくねよ。』

「夏休み7日目 『きょうは、おんせんに行くよ。』10分ご『やっと【ゆ、よつてくかい】についたね。』『うん。』20分ご、ふろをでてしよくどうでおふろのかんそうや思ったことをいったりして、いろんなこともしたけどみどりとわたしは、ぐっすりねました。わたしは、よるにおきていました。な

ぜならとなりでねていたみどりがいないんですもの。」

わたしは、みどりをさがそうとふとんをでたら、となりのへやがひかっていたのではいると、みどりが日記を書いていました。わたしはみどりがなんで日記を書いていたのかききました。するとみどりはいいました。

『わたしは寿命であと三日しか生きられないの。』わたしは、それをきいてびっくりしましたが、こいういしました。

『へーそうなんだ。じゃあ、あとのこりすくないのち、いーっぱいあそんで、いーっぱい思いで作ろう。』

『…うん。』

よくじつ、わたしたちは、いえにかえった。かえるとみどりがおんせんのはなしをした。『おんせんって川やうみとちがって、あたたくてきもち

よかったよね。あと、陸ってけっこうたのしいばしよだね』

『…うん。』

「夏休み8日目 みどりが人間にへんしんしていた。わたしは、びっくりしました。

『さいしょから人間のようなすがただったけど、もっと人間のすがたになりました。』

もともとみどりは、あたまにおさらをのせていたからぼうしをかぶらせていたのに、おさらはなくなっていました。

わたしは、『なんで人間のすがたになったの。』ときくと、みどりがこういしました。

『わたしは、たぶん陸になれて人間のすがたになったんだと思う。』とみどりは、いいました。

その日のよる、わたしは、みどりとガリガリくんをたべながらいました。

『わたしは、よるがすき。よるにしかでないつき

やほしって、よるだからこそきれいだよね。』

『うん。』

『あとあしたは、家にかえる日だわ。』

『うん。』

そんなはなしをしていると、わたしは、ねむたくなつて、ねてしまいました。

わたしは、すぐにおきました、またみどりがいなくなっていたから、いそいでみどりをさがしに行きました。わたしはみどりと、はじめてあつた川に行きました。

『みどり、なにしてるの?』

『あつ、めいじゃん。めいもしつてるでしょ。きょうでわたしは、しぬ。だからここでのうと思つただけ。あと、わたしにさいきん違和感をかんじていたでしょ。』

『あ、あの違和感か。』

『そうあたしは、あのときかっぱのおたから【し

りこだま】をさがしていたの。それできのう【しりこだま】をみつけたんだ。だからあげる。』と、みどりにいわれ、【しりこだま】をもらった。よるがおわり、あさになると、みどりはしんでしまった。

みどりは、さいごにいいました。

『めい、ありがとう。』

「めい 夏休みにこんなことがあつたんだ。みどりさん天ごくでおしあわせに。」

といっているわたしは、うしろにだれかいるとかんじたのでうしろをむくと、日記にかいてあつたみどりさんがたっていたんですもの。わたしは、びつくりしましたが、なんでここにいるかききました。

「【しりこだま】は、ねがいをかなえてくれるんだ。だから、しぬちよくぜんにわたしはこうねがつた

の。うまれかわったら人間になりたいと。思った
ら人間になってたの。わたしめいとあそんだりし
たいけど、なみだをこらえてしない。それがあの
このしあわせなら。」

「どういうことですか。」

「みみかして。……………」

「わかった。じゃあともだちがほしくなったら、
わたしがともだちになってあげる。」

「ほんと、うれしい。めいのともだちならしんじ
れるよ。あ、そろそろ川に帰ろ。じゃあね、ここ
ろちゃん。」

【読売新聞社賞】

私とお猿さん？

九重町立東飯田小学校 4年

まつおか
松岡 実和
みわ

今日の帰りの会ときに先生が、

「最近、ニュースで猿がいることがわかってい
ます。歩いて帰る人は特に気をつけてください！」

と、言いました。時々そんなことを言われるが、

一回もそんなものに会ったことはありません。

私がいつものように帰っているときに一匹の

お猿さんがいました。

(これが先生が言っていたお猿さん?)

何かモゴモゴとしています。私は何故かとても気
になって、「どうしたの?」と聞いてみると、「も
う何日もご飯を食べてないんだ。」と言ったので、

そこらへんに落ちていた、ファミチキをあげまし
た。そうしたらなつかれたのか、足を持つてはな
してくれません。いつもなら猿は嫌いだけど、何
故か可愛く見えてきて、おいていくのは可哀想だ
なと思い連れて帰って飼うことにしました。

ようやく家に帰ったら、お母さんの電話で話し
ている声が聞こえてきました。怒られそうだった
ので裏の玄関から入りました。部屋の中でいっし
よにボール遊びをしていました。

電話が終わったお母さんがボールの音に気が
ついて、こちらに来てしまいました。私は何も出
来ませんでした。そしてお母さんに見つかって、
「何で猿がいるの?」

と聞かれたので、

「おなかが空いていたからファミチキをあげた
らなつかれて飼うことにした。」

と答えたら、ファミチキのことと連れて帰ったこ

とで怒られてしまいました。

それを見ていたお猿さんは、お母さんがこわかったのか、お母さんに見つからないように森の方へにげていきました。

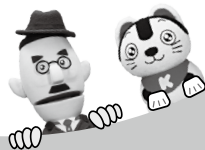
その後、お猿さんは警察が見つけて遠くの森までもどしました。

次の日、別のお猿さんがうちに来て言いました。そのお猿さんは私をにらんで言いました。

「うちの子の匂いがするんだけど……」



【中学生の部】





【大賞】

鏡の魔法は美女を救えるのだろうか

玖珠町立くす星翔中学校 1年

秋好 彩音
あきよし あやね

ひさしぶり!! オイラだよ!! いやあ、最近寒くな
って…ん? え、オイラだよオイラ!!

は!? 「だれだよハイテンションでうるせえな」つ
て!? おいおい笑いをとろうってか? おオイラは
魔法の鏡だよ。忘れちゃったかな? ったくなんだ
よ、なんか悲しくなってきたぜ…よおーし、そん
じゃオイラの武勇伝きかせてやるよ。っておい!!
ねるな!!

えー、気をとりなおして…もうかなり前の話だ
が、オイラは闇市で取り引きされていたんだ。な
んせオイラは世界のすべてを知っているすごい

鏡だからな。けっこーな額だったんだぜ? ○千万
円だったっけ? でもソイツは迷わずオイラを手
にとった。

「こちらをくださる?」

思わず字のフォントをかえてしまうくらいドロ
ドロした美しい声だった。んでかしこいオイラは
悟ったのさ。コイツは魔力がある人間だって。琥
珀色の瞳にはしっかりと魔力が込められていた
し、オイラがいくら金色に輝いているからって、
こんな不気味な鏡を買うヤツなんて、よほど趣味
が悪いか魔力をもっているかの二択だ。まあそい
つはクソださい緑のドレスを着たクソださいヤ
ツだったから、前者にも後者にもあてはまるオイ
ラを買うのにふさわしいヤツだったわけだが。…
っておいおい、オマエなんでそんな顔してんだ?
お? 「不気味な鏡がいきなりしゃべりだして、驚
かないヤツなんかいない。というかだれだよ。」っ

て!?とぼけるのもいいかげんにしろよ…オイラはあの有名な昔話「白雪姫」の魔法の鏡だぞ…な?知ってるだろ?すぐ気が付いてくれると思つたが…ぴえん超えてばおん超えちゃつてるよコリヤ…ん?「気付くのが遅くてごめん。さっきの続きを教えてほしい。」って?はー、しかたねーな…。

まーとにかく、そのクソダサ緑ドレスに連れていかれた場所がちっちゃポロ小屋だったのよ。ひどくない?オイラ叩いたりけつたりされるかと思つたよ…でも違つたんだ。小屋に置いてあつたニスのはがれたテーブルに腰をかけると、オイラにこう言つたんだ。

「鏡よ鏡。世界で一番美しいのはだあれ?」

そう言われた時、何か違和感を覚えたんだ。でも琥珀色の瞳が強く光った瞬間…クソダサ緑ドレス以外の物が見えなくなった。眼中にないって

うか…緑ドレスだけが輝いて見えた。よく見たら、鼻も高いし二重だし…足も長くて髪もツヤツヤだ。無意識に、

「それはあなたでございます…。」

なんて答えちゃまつた。美しい緑ドレスはニヤニヤと笑い、サラサラの髪を耳にかけながら言つた。「いいかい?もうわかつていると思うが、わたしは魔力をもった人間だ。だからお前に気付いた。でも、次の新月の日に私の魔力はつきる。色々なことがあつてね…。こうやって話すのもあと数日だけさ。そこで、だ。オマエに頼みがある。一つ目。私の質問には正直に答えること。ウソを言つたらその場で叩きわる。二つ目。今から私の魔力を少しオマエに渡しておく。三つ目。新月の後、私のタイミングで魔力を返してもらう。そして四つ目。これらの頼みをゴミ箱までもつていけ。頼まれてくれるか?」

なんだよゴミ箱までもっていけつて…そこは墓場だろ…まあオイラの墓場はゴミ箱だが。

「…無反応はイエスとうけとるが？」

いやフツーに考えてノーだろ。まあ美しいし、イエスでいいか。なんて、チョコより甘い考えで、「もちろんでございます。」

なんて答えた昔のオイラはバカだった。

…お？だいぶ興味がわいてきたっぽいな？よかった。よかった…ここからは「白雪姫」も出てくるから、寝るんじゃないぞ？

一週間もしないうちに新月の日になって、緑ドレスの魔力は消えた。その後もたびたびオイラに質問をしてきたが、一年余りたっても魔力を返せとは言われなかった。そして、三年がたったある満月の日…緑ドレスは結婚した。結婚式でも緑色のドレスを着ていたし、よほど緑が好きなんだな。他にもこの三年間である程度のこととはわかって

きた。好きな食べ物は砂糖漬けにしたライムで嫌いな食べ物はリンゴ。運動はできなくて、とにかく美しい。美人。結婚相手は国の下偉い人だったが、きつとヒトメボレしたんだろうなあ。結婚してまもなく、でっかい城で暮らすことになった。緑ドレスに与えられた部屋も広くて天井も高く、ホコリ一つ落ちていなかった。家具もピカピカで、まるで芸術のようだ。緑ドレスは、すでに置いてあった鏡をメイドに渡して、そこにオイラを立てかけた。その日から約五年間その場所にいることになるんだぜ。しばらくして部屋をだれかがノックした。次の瞬間…オイラは口もないのに叫びだしそうになった。緑ドレスより美しいヤツが入ってきたのさ。目を見張るほどに白く、美しい肌。ポブカットの真っ黒の髪。優しく弧を描く赤いくちびる。スタイルもいいし、パステルレインボーのドレスもよく似合っていた。世界で一番

美しいのはこの人なんだってすぐわかったぜ。

「初めまして。今日から娘になる白雪と申します。よろしく願います。お義母様。」

何とも言えない、透きとおったかわいらしい声。緑ドレスもほほえんでかえした。

「あら。私からあいさつに行くべきでしたわ。アナタがうわさの白雪姫ね。今日からよろしく。」

負けずおとらず美しい声。天国ってこんなに近くにあるんだ、なんて思ってしまうほどよ。…けっこー話したけど、ぶっちゃけどうよ。すごいだろ？昔話のプロローグって。ん？「そんなのいいから続きを話せ。」って？それは聞くヤツの態度なのか？まあいいケドヨ…ここからはみんな大好き「白雪姫」の本編だからな！！

城に引越してきて一週間たったところから、緑ドレスの様子が少しおかしくなりはじめた。白雪姫への態度がキツイっていうか…美人って怒る

と怖いんだよなあ。ずっとビクビクしながら二人のやりとりを見てた。そんなある日…

「ねえ鏡。世界で一番美しいのはだあれ？」

なんて聞いてきた。んで、頭（オイラ）に頭とか目とか口はないケド）に浮かぶのは白雪姫。オセジであなただ様って言おうかと思ったけど、ボロ小屋でウソはつくなくなって言われてたしな…って思ったオイラはやらかしてしまっんだ。

「それは白雪姫です。」

そう答えた瞬間…緑ドレスの目があの日みたいに強く光った…ように思った。もう緑ドレスに魔力はない。今度こそ叩き割られるってカクゴしたけど、

「…そう。私じゃないのね。」

とだけ口にして部屋を出ていっちゃった。

その日から緑ドレスは白雪姫をイジめるようになった。口では言いあらわせないほどにインシ

ツだった。ほぼ毛玉の小犬みたいなあつかい。だれにもバレないようにコソツとするんだからタチが悪いんだよなあ。それでも白雪姫は美しかった。イジメにたえるメンタルもあった。緑ドレスはひんぱんに美しい人を聞いてくるが、オイラの答えは変わらなかった。

そんなある日。緑ドレスは一人の狩人を呼びだした。

「白雪姫を森に連れて行って殺せ。しくじったらおまえを殺める。」

さすがにマズいдар。そう言ってやりたかったが、狩人は、

「わかりました。」

とだけ言って部屋を出ていった。緑ドレスは、

「今日のディナーは何かしら？」

とすこぶるご機嫌だった。そこでやっと気付いた。この人の心は美しくない。外見だけしかとりえが

ないんだ。なんてかわいそうなんだろう、いくつも年下の白雪姫の美しさをねたんで、挙句の果ては殺すつもりなのだ。でも鏡のオイラは何もできなかった。

：数日後、狩人は先が赤黒い矢をもって部屋をおとずれた。その日から白雪姫は姿を消した…。

な？緑ドレスってけっこーひどいдар？外見はいいんだけどな…っておい！なんでオイラをたたくんだよ！！緑ドレスが嫌いなのはわかるけど八つ当たりはやめてくれよ…な？

でも、かしいオイラはすぐに気付いた。矢の先についている血は人間のものじゃない。…たしかウサギだったと思う。ということとは？…どういうことだよ白雪姫生きてんじゃねえかよ心配させんなオラァ！ってことよっ！もうそのあとは必死だぜ。かき集められるだけの情報とオイラの知能を駆使し、白雪姫の居場所をつきとめた。い

やなんかストーカーみたいじゃねーか。まーある意味そうかもしれないけどさあ…。

ん？なんかおまえ眠そうだなあ。まあ今一時だしな…うーんほんとは一氣に話してしまいたいんだけど…。まあいいや。とりあえず今日は寝なさいよ！続きは明日話してやるし！

「おーい。」

…ん？なんか聞こえる？

「おーきーろー。」

だれの声？

「今十一時だぞー！」

え？

「おい、ホントにおきろって。」

まって私昨日…！

「オイラの武勇伝聞かないのかー。」
がばっ!!

「お、やっとおきたな。」

目の前にはしゃべる（魔法の？）鏡。よく見たら着ているドレスがホコリまみれだ。まあこんなところで寝たらトウゼンのコトナンダケド…。

「ゆ、夢じゃなかった…？」

まだぼんやりしている頭をフル回転させる。

「オマエどんだけ寝るんだよ？十時間睡眠だぞ？お？健康かよこのヤロウ。」

えっ!? 10時間？私何時に寝たのよ!?

「まー、魔力をもたない人間が魔物にはじめてふれたんだもん…。しかたねーといえはしかたねーか…。」

私一時に寝たんだ…。

「…聞いてねーな。コイツ。」

「え、えっと…昨日の話の続きの前に朝ごはん…。」

「そんなひまないわあ!!」

わりこんできたあ?!

「オマエがグースカ寝てるせいでコッチはひま
でひまでしかたなかったんだ。ただでさえ十年間
フリーンされてたのに! オイラのコーキシンを
引っ張り出してきたのはオマエだからなあ?!

ええ…。

「まあ、あと少しで話し終わるからがんばってく
れよっ!」

私はあきらめて鏡の話を聞くことにした。

あ、オイラの武勇伝はオイラが一人称だからな、
ごっちゃにすんなよ。

緑ドレスはずっと上機嫌だった。それとは逆に
メイドだとかの城で働くやつはだいたい気付き
始めてた。白雪姫は緑ドレスに殺されたんじゃないの?
アイツがきてから白雪姫の様子がおかし
くなかった? あることないことでっちあげられ
て緑ドレスはどんどん孤独になっていった。そん

なこんなで不機嫌なことも増えてきた。そしてそ
の日はくる。

「鏡よ鏡。この世界で一番美しいのはこの私よ
ね?」

オイラ、じつはこの質問をずっと待ってたんだ。
だって、本当のことを伝えられるから。

「いいえ。違います。」

部屋に少し沈黙がおとずれる。

「は、はあ? どうしてよ? 白雪姫はもうこの世に
いないでしょ?」

聞かれたら答えないといけない。

「いいえ。この世界で一番美しいのは、森の小屋
で小人と暮らす白雪姫です。」

そう伝えたかった。白雪姫はもうここにもどるこ
とはない。だからもうオイラと白雪姫を解放して
ほしかった。

「な、なんですって?」

緑ドレスは顔をリンゴのように真っ赤にしてぶるぶるふるえている。この際、オイラのことを粉々に割ってもらってかまわない。なんてイケメンみたいなことを考えていると、緑ドレスは口をひらいた。

「鏡。約束の 때가 きたみたい。私の魔力を返して。」それはさすがにまずすぎるでしょ！ なんとして防がなくては。

「それはできません。」

「約束、わすれたのかしら？ そんなわけないわよね？」

ヴッッ：粉々にされてもいいなんて思ってます。テイセイします。オイラ鏡なんで二言あります。

「…わかりました。」

こっちも魔力使うってのに…。

その日から緑ドレスは毒を作りだした。魔力ってそれに使うんだ…。なんて軽くとらえてた。

そして気付く。『いや、コレ白雪姫殺そうとしてるうー!!』…ちよつと遅すぎた気がしなくもないけど。でも鏡のオイラにできることなんて…。

そんなことで緑ドレスはドクリンゴを完成させた。ものの一週間くらいで作っちゃうんだから才能のカタマリだよ。そして…。

「クッククック、じゃあね鏡。私は白雪姫のところに行ってくるよ。」

ついにこの時がやってきた。

「…何をしに行くのですか。」

「お？ オマエから話しかけてくるのは初めてだなあ。…クッククック。わかってるくせに。このリンゴを売りに行くのさっ。」

そう言い終えるとともにフツと消えた…。いやこの展開は考えてなかったわ!! 今ここで説き伏せるつもりだったのに！

結局なにもできないまま時はたち、夜おそくに

緑ドレスは帰ってきた。

「ただいま。」

それも、満面の笑みで。すぐにオイラの頭やらなんやらをフル回転させて白雪姫をさがす。…見つけた！白雪姫は毒で眠っていた。

「鏡よ鏡。この世…。」

「森でねむる白雪姫です！アンタじゃない！」

頭に血がのぼっていたのか、そのときのオイラはあの緑ドレスの話にわりこんでいた。

「…ほう。でも白雪姫は呪われている。」

「!?」

「ドクリングのおかげさ。あと五日以内に誰かの強い愛情…ああ、小人じゃすこし力不足だよ？人に強いレンアイカンジョウを向けてもらえなかったら死ぬ。」

待って、コイツまじで汚ねえって！おかしいだら!?

「まああと五日で私が一番美しい人間に成るんだ。ゆっくりいこうじゃないか？」

ああ、オイラが鏡じゃなかったらな…いや？鏡だからできることもあるんじゃない？

四日後、城に白雪姫が帰ってきた。ん？展開がはやすぎるって？ま、そーだよなあ。いや、なんか照れくさいんだよお。実は…となりの国の顔よし・頭よし・性格よしのカンペキ王子をかなり強引に白雪姫のところに連れてったんだよ…：

ボクの名前はチョイ・チャラスーギさつ。トナリーノ王国の王子。今日は暑くも寒くもないいいカンジの温度だからよく眠れそうだぜつ。へつ。ベッドに入り、目を閉じた…ガッシャーン！
「×◎?!△□△○○◎ドォーンセニオリイイーターアー!?」

って意味不明な悲鳴をあげるほどの何かの音が

部屋にひびきわたった。

「オイ！おまえ！おきろオオオ！」

なんなんだ！鏡がしゃべってやがる！

「時間がないんだよ！いいから近くの森に行け
コノヤロー!!」

それは人にものごとを頼むときの態度かあああ
あ?!もうなんでもいいから、とにかく怖い
いい！みたいな感じでバジャマのまま外に飛び
出した。くつははいてきたボクってユーシューじ
やない?ん?なんか声がきこえる?木のかげか
ら顔をだすと、小人が一人なにかに向かってなに
やらしゃべっていた。そつと近づくと、うしろか
ら声をかける。

「やつ!どうしたの?」

「ウウオオー!」

…この小人もけつこー悲鳴がウルサイタイプらしい。

「どうしたの?なんで泣いてるの。誰だいこの美女ワァー!」

…ってことがあってよお、この後は物語どおりの
ことがおきて、緑ドレスは城を追放された。その
一年後、白雪姫は結婚した。

…まあその続きはオマエが一番知ってるだ
ろ?…ハハツ、なんで泣いてんだよお。オイラに
ほれちまったか?白雪姫。

しゃべる鏡の言うとおり、私…白雪姫は泣いて
いた。まさかこのシユミの悪い鏡がうらでこんな
に活躍していたなんて。あの頃は、いつもお義母
様のいいなりになっていて、ほんつつとにツラ
イ毎日だった。森につれて行かれた時、本当は殺
されるんだらうなって気付いていた。でも、あの
人は私を逃がしてくれた。

『いいですか、もうあの城に戻ってはいけません。

え？私のことは気にしないでください。この道をまっすぐ進めば小人の家があります。そこで幸せに暮らしてください。亡くなったお母様もきっとそれを望んでいます。』

そんなやさしさをくれた人は城にいなかった。今でも胸がキュツとなる、本当にすてきな人だった。そうか。あの日から十年以上たったのか。もうこの城には戻らないつもりだったけど、お父様が亡くなったから久しぶりに足を運んだのだった。古びた倉庫に足をふみ入れたのはほんときまぐれ。外はてんやわんやだろう。そろそろ外にでなくては。

「…ねえ鏡さん。一緒に私の暮らす城にこない？もつといろんな話を聞きたいの。」
きつと断るだろうなあ…。

「いいヨ。」

ええ…やっぱこの鏡、チャラいわ。

これは、わりと重要な役なのに見向きもされない、かわいそうでチャラくてちよつとカッコいいかもしれない鏡と、今も昔も愛され続ける白雪姫の、今と昔の話。



【佳作】

くもいろ

玖珠町立くす星翔中学校 2年

ほうす
寶珠 咲羽

「ねえ、知ってる？自分が見てる雲の色で心のキレイさが分かったり、気持ちの変化が分かるんだって。」

「え、そーなの！？私、白に見えるんだけど…。」

「なんか普通の人は見えんっぽい。」

「じゃあ私普通の人じゃん。」

「うん。そーなるね。」

「色つき雲見てみたいな。」

「色つき雲か…俺も見てみたいな。」

おっと、まずい。つい心の声がもれてしまった。

俺の名前は純。高校二年生。実はさつき女子が話してた内容が気になって気になって仕方がない。どうすれば見られるのかな…。

帰り道、色々と考えながら帰っていると、道端でうずくまったおばあさんが。どうしたのかな？

「あの？大丈夫ですか？」

「うう…。」

何度聞いてもおばあさんはうなるばかり。

「困ったなあ。どうしよう。」

困った純はとりあえず近くの病院に連れて行くことに。診断結果は胃腸炎でした。

「迷惑をかけてごめんなさいね。あなたのおかげで助かったわ。ありがとう。」

「いえいえ。良くなって良かったです。では。」

「ちよいとおまち。はい、これ。助けてくれたお礼に魔法のアメちゃんあげるわ。これを食べたら、自分のことがもっと分かるようになるかもね。」

「もらって帰ってきたものの、あのおばあさんが言っていた事の意味、よく分からないな。まあいいや。アメ食べよ。ん!?おいしい!」

純はおいしすぎてもう一個食べたいと思いました。

次の日。純はいつもと変わらない朝をむかえ、学校に行き、授業を受け、家に帰っている時のこと。迷子になっている子供を見つけました。その子を親のところまで送り届け、家に帰ろう、と思ったその時、目を見る景色が純の目の前に広がっていました。

「雲がピンク色…。」

純はふと思ひ出しました。あの女子たちが言っていたことを…。

人を助けたり、優しくしたりした日はピンク、登校中、車にはねられて死んでいるネコを見てかわいそう、悲しいと思った日は青、大好きなハン

バーグを食べて幸せな気持ちの日は黄色、期末テストで勉強した成果がしっかり出せるか不安な日は緑、友達と遊んで楽しかった日はオレンジ。そう、純の気持ちに合わせて雲の色が変化しているのです。

「ねえ、見てみて!雲がオレンジ!」

「え?白だけど。」

周り自分が見えている雲の色が違うと気づいたのはおばあさんからアメをもらって食べた次の日。あのアメを食べたから雲の色が周りの人と違って見えるんだ。まあ、色つき雲は見たいと思ってたし。でも、普通の白い雲も見なくなってきた…。

一か月後の学校でのこと。ガッシャーン!

「おい、やべーって!怒られる!」

「純、お前が割ったんだろ!」

「ちげえーし!」

純は友達とあばれて教室の窓を割ってしまいました。するとそこへ先生が。

「なんの音だ!？」

「先生ー、ガラスが割れましたー。」

おもしろがつて先生に言う女子たち。

「誰が割ったんだ!」

しーん…。

「おい純!正直に言えって!」

「先生ー、こいつが割りましたー。」

しーん…。純は、クラスの中でも陰のうすい木村くんを指さしたのです。

「なにやってんだよ!正直に言えよ!」

「うるさいな。そんなん言うんだったらお前が言

えばよかったじゃん。」

「…っ!」

「まあいいだろう。これでこいつも少しは有名になるんじゃないか?笑。」

「木村、あとで職員室に来い。」

「…はい。」

「下校の時刻です。教室やグラウンドに残っている人は…。」

「はあー、やっと帰れ…なに、これ…。なあー、今日の雲の色やばくね?」

「え、いつも通りだけど。」

は、初めて見た。真っ黒な雲。なんでだっ?もしかして、今日悪いことしたからか…?あ!おばあさんが言ってたあの言葉、そういう意味だったんだ!ってことは、今の俺の心の色は黒色ってことか…。

それからというもの。どんなに良いことやうれしいことがあっても、ピンクや黄色、オレンジ色の雲を見ることはなくなり、純の上にある広大な空は黒一色で染まっていたのでした。

【選考委員特別賞】

満月の夜

玖珠町立くす星翔中学校 2年

宿利 しゅくり 英美里 えみり

むかしむかし、あるところに、うさぎのカラシ、オオカミの望月、ライオンのガーラ、タヌキのタヌどんとイヌのワンきちがいました。みんな仲よしの友だちです。だけど、この五人は、月に一回しか会えません。

会えるのは、満月の日の一日だけです。もし雨が降った日は、みんなと会える確率がぐっと下がります。楽しみに待っていても、満月の日に雨が降ったり、曇ったりして、会えない日もあります。うさぎのカラシとオオカミの望月とライオンのガーラとタヌキのタヌどんとイヌのワンきは、

いつも家族と旅行に行っています。

今までいろんなところに、旅行に行きました。今まで行ったところは、雪の国と火の国と砂の国です。この三つの場所に行くことがとても楽しみです。三つの国がどんな国か紹介します。

雪の国は、砂糖のような雪が一面に降っていて、春夏秋冬いつも寒いです。一度も雪が止んだことはありません。いつもさらさらの粉雪がきらきら光りながら降っています。

火の国は、火を自由にあやつる国です。火を使うと病気を治せます。みんながとても苦しい病気を火の国で治せるのです。そして、火の国は、夜でも明るいのです。だから、夜でも子どもたちは、外に出て遊びます。

砂の国は、砂嵐が一年中吹いています。たまに、砂嵐で行方不明になる人が出てきます。でも、砂の国には探してくれる人がいて安全に暮らせて

います。

この三つの国で、動物たちが一番好きな国は、雪の国です。理由は、一年中雪が降っていて、雪がなくなることがなくずっと遊べるからです。

そして、その満月の日がちょうど明日なので、みんなそわそわしながら明日を待っています。

いよいよ、次の日になりました。みんな会うのが楽しみだったようで、約束の時間より早く着いてしまいました。

今日は、満月のお祭りなので、みんなで何をしようかと話し合いました。

うさぎのカラシは、お月見をしようと言いました。みんなうさぎのカラシの意見に、

「さんせい」と言いました。

けれども、オオカミの望月は、満月がきれいなので、反対しました。みんなは、オオカミの望月を助けるためには、どうすればいいかを考えまし

た。タヌキのタヌどんがアイデアを思いつきました。それは、満月をオオカミの望月から隠すというアイデアでした。

さっそく、カラシが月にジャンプして月を葉っぱで隠しました。

イヌのワンキちは、望月を月の見えないところにつれていきました。

そして、月見のときには、葉を少しずらして月が見えるようにします。

月見に使うススキは、ライオンのガラがとってきてくれます。

月が隠れて、オオカミの望月は、吠えることがなくなかったので、安心して外に出れます。

ひさしぶりに集まったみんなは、楽しく月見ができました。みんなは、どの国に旅行に行ったのか、会わない間、何をしていたのかを話しました。みんなの話をみんなで聞いて、楽しみました。

さて、そろそろ月見も終わりに近づいてきました。みんなは、次に会った時には何をするのか話します。

次の季節は冬です。するとうさぎのカラシが、雪合戦をしようと言いました。みんなもその話には、賛成です。

だけど、サバンナにいるガーラは、寒さになれていないので、不安そうにしました。そしたら、ワンきちがガーラのそばに行って、

「寒いときは、ぼくの力を少しわけてあげるから大丈夫だよ。」と言いました。

ワンきちに言われて、ガーラはうれしい気持ちになりました。

こんなふうに、一人が困ったら、みんなで助けて、楽しく暮らせる未来をつくっていきます。

みんなが集まった最後には、みんなで演奏します。オオカミの望月は、ユーフォニアム。うさぎ

のカラシは、トランペット。ライオンのガーラは、チューバ。タヌキのタヌどんは、ドラム。イヌのワンきちは、ピアノ。

そしてみんなが集まって弾くのはどうぶつビスケッツの曲です。このどうぶつの演奏を聴いたみんなは、しあわせに暮らしています。

そのうえ、演奏したどうぶつたちは、みんなのしあわせをずっとずっと続くように願いながら、みんなで集まった時には、いつも忘れずに、演奏しています。

みなさんもこんな動物たちのように、みんなのしあわせを信じて、小さな思いやりの花を一つひとつ咲かせていきましょう。

【読売新聞社賞】

桃太郎の代で鬼を倒せなかった話

玖珠町立くす星翔中学校 2年

もうり
毛利 太河

「……、何て事だ……犬も猿も雉も、俺が目を離しているうちにこんな有り様に……。まずい、鬼がせまって来ている……すまない皆、俺は、撤退する……」

「どこだあ桃太郎！あとはお前だけなんだあ！観念して出て来い！」

「あいつ、俺たちに恐れをなして逃げたんじゃねえのか？」

「はっ！馬鹿が図に乗るからそうなるんだ。」

犬も猿も雉も鬼にやられ、術を無くした桃太郎は鬼ヶ島から舟一つで逃げていった。

それからというものの桃太郎が鬼ヶ島に姿を現すことはなかった。

時は経ち、鬼の悪行も勢いを増す一方、鬼の界限では様々な派閥が起り、弱い鬼は強い鬼からの惨酷な仕打ちを受け、鬼ヶ島からの亡命を企む者もいた。しかし、捕まれば最後、拷問を受け、日にも当たらず殺される。いわば監獄そのものと化した。

何も罪を犯さずとも、鬼として産まれたことを罪と言うようだった。

それは、人間でも似たようなことが言えた。人々の期待を背負い鬼ヶ島へ向かった桃太郎も打つ手を無くし、帰ってきたものだから人々から掛けられる声は華々しいものではなかった。嘘付き、弱者、臆病者、などと貶され桃太郎は心を病んでしまった。

それから桃太郎の一族は人々から避けられや

がて嘘付きの一族と呼ばれるようになった。

だが、桃太郎の雄姿を讃え、求婚しに行くものも少数ながらいた。その中で桃太郎は花という名を持つ大層美しく、心の優しい娘と結婚した。

それから桃太郎と花の間に子どもが産まれ、名は桃助と付けられた。桃助は顔立ちもよく優しい性格の持ち主であった。だが、「嘘付きの一族」として産まれた桃助は小さい頃から村の子ども達にいじめられていた。

殴られ蹴られ、時には骨を折られることもあった。桃太郎と花は桃助をただ抱きしめることしかできなかった。桃助は心の優しい性格だから、骨を折られても、笑って何も抵抗しないと知っていたから。

それから桃太郎はこう呟くようになった。

「鬼とは人間の心に巣食うものだ。」と。

桃太郎の元に産まれた桃助は犯罪者同様の仕

打ちを受けながらもたくましく成長していった。

ある日、桃助が村の子ども達からいじめられているところに一人の女の子が来た。

「あんた達、何で人を殴ってんのよ!」

その女の子はそう言って桃助をいじめていた一人を突き飛ばした。

突き飛ばされた子はしりもちをつき、半べそかいて逃げていった。それに続き、他の子も逃げていった。

「ありがとう。」

桃助が女の子に礼を言うのと、その子は笑顔で

「大丈夫、私が守ってあげるから。」と言った。

桃助がその女の子の名を聞くと、春という名だとその子は答えた。年も桃助と同じ十だった。

それから二人は遊ぶ時もお遣いをするときもずっと一緒だった。

だがある日、春がいつも遊ぶ時間になっても、

一時間経っても来なかった。桃助は心配していろいろな場所を捜しても春は何処にもいない。

桃助は諦めて帰ろうとした。すると春とお遣いをする商店街の方から春の声が聞こえた。桃助が急いで声がした方に走るとそこには倒れ込んだ春と鬼がいた。

桃助は咄嗟に

「やめろ！」

と叫んだ。

鬼は桃助に気付き、桃助を睨みつけてきた。

鬼は桃助に

「お前どこかで見たことある気がするな。」

と言った。

桃助は戸惑った。桃助自身、鬼と出会ったこともない。勢いで助けには来たものの桃助の両膝は酷く震えていた。

すると鬼が、

「ああ思い出した。お前の父ちゃん、桃太郎という名だろう。」

とにやけながら言った。

桃助は、

「そうだが、なぜお前が知っている。」

と震えた声で聞いた。

すると鬼は、

「俺が桃太郎のお供の犬を殺したからなあ。」

と笑いながら答えた。

続けて鬼が

「お前の父ちゃん無様だったぜ。無意味な命が努力しても、結局は無意味なんだ。俺とそっくりだ。」

と笑いながら言う。

「この世に無意味な命なんてない！この世に生まれたからには必ず意味がある！だから君の命だって意味はある！」

と初めて桃助が怒鳴った。

「人間はよお綺麗事言うのが好きだよなあ。…馬鹿馬鹿しい。」

と吐き捨て、鬼は去っていった。

幸い春はどこも怪我していなかった。

氣付けば辺りは真っ暗だった。桃助は春に夜道に氣をつけるよう注意し、春と別れて急ぎ足で家路についた。

桃助が家の戸をあけるとそこには横たわる桃太郎の姿があった。そのそばにはうつ向いて泣いている花がいた。桃助は訳が分からず母の花に事情を聴いた。花いわく、いきなり桃太郎が倒れ込み、息もしていなかったと言う。

桃助はその晩、涙が枯れる程泣いた。

それから二年後、桃助は春と結婚し、子どもも産まれて十五という若さで父となった。

産まれた子の名は桃信と付けられた。

桃信は顔立ちも良く、力も強かったが、無口で

あまり人と話すことは多くなかった。だが手伝いなどはきちんとしていたため、心は優しくかった。花は初めて自分の孫ができたのと知ると大層喜び、この地域で盛んだったきび団子をよく食べさせていた。

そんなある日、桃助が何の前触れもなく息を引き取った。家族の誰にも言っていなかったが病氣を患っていたらしい。

いつも通り眠りにつき、朝が来ても起きずにそのまま死んでしまったという。

桃信はまだ七つ。あまりにも早すぎる父との死別だった。

それから桃信は花と春に愛情をもつて育てられ、すくすくと成長していった。

ある日、桃信がお遣いを頼まれ商店街に行くと、そこに子どもの髪を引っ張っている鬼がいた。

鬼は桃信を見つけ、

「お前の顔、桃助に似てるなあ。親子か？顔立ちや佇まいもそっくりだ。」

と言った。

桃信は鬼に子どもの髪から手を放すように命じたが鬼は聞く耳を持たない。

鬼が

「こんなくだらない命、俺がどうしたっていいだろう。」

と言ったとたん、桃信が鬼の腹を勢い良く殴った。

鬼は衝撃と激痛で言葉が出なかった。

桃信は鬼に

「命を軽んじるな。」

と言い、鬼にこの場からすぐさま去るように命じた。すると鬼は腹を抑えながら一目散に逃げた。

鬼に捕まっていた子どもは桃信にお辞儀をしてかけ足で走っていった。

その後、桃信は頼まれていた豆腐と味噌を買って、足早に家に帰った。

その晩、桃信は鬼が言ってきたことが気になっていた。なぜ鬼が父の桃助を知っていたのか、なぜ反撃をしてこなかったのか、桃信は諸々のことが気になり、母の春に聞いてみることにした。

桃信が春に鬼と会ったことや鬼が桃助を知っていたことなどを話すと、春は平然と語る桃信に驚きながらも答えた。

春は桃信が無傷な訳を聞くと、桃信は腹を一発殴ったら逃げていったと伝えた。それを聞いた春は目玉が飛び出るほど驚いた。

桃信が鬼と出会ってから約二年後、ある日桃信がお遣いをしていると、桃信の元にあの時子どもの髪を引っ張っていた鬼が走ってきた。

その鬼は桃信に土下座をして謝った。

鬼はこれまでの自分の行いを悔いて、目一杯桃

信に謝罪をした。

なぜいきなり鬼が心を入れ替えたのか、桃信は鬼に理由を聞いた。鬼いわく、自分は弱い鬼で、鬼ヶ島の地獄のような日々になんて耐えかねて逃げたと言った。

鬼ヶ島からの脱獄を唯一成功できたのは自分だけだと言い、他に逃げ出そうとした鬼は皆強い鬼に捕まり、殺されていったと桃信に伝えた。

鬼ヶ島から逃げた後は人間の住む土地を支配しようとしたが、桃助や桃信のこともあって、それまでの自分が酷く惨めに見えて、心を入れ替えるように決心したと言う。

鬼は桃太郎にお供の犬を殺してしまったことやこれまでの悪行を謝りたいと桃信に伝えたが、桃太郎はもうこの世にはいないことを桃信は鬼に伝えた。

すると鬼は涙をこぼし、地面にうずくまって、

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

と日が暮れるまで謝った。それから鬼の姿を見るものは、なくなった。

ある日、桃信が散歩から家に帰ると花が顔を白くして布団に横たわっていた。

桃信は虚ろな目で天井を見つめながら花の横に座る春に状況を聞いた。

春いわく、一緒に料理を作っていたところ急に咳込み、亡くなってしまったと言う。

桃信は今にも泣きだしそうな春をそっと抱きしめた。

それから約三年後、桃信がお遣いに出かけると、桃信の前に一体鬼が現れた。

その鬼は桃信を見つけると、桃信の元へ走ってきた。体格もしっかりしていて、見るに恐ろしい姿だった。

その鬼は桃信の前で止まると桃信にひざまず

き、

「お願いがあります。」

といい顔を上げた。その鬼は三年程前に桃太郎に謝りたいと言っていた鬼だった。

桃信はその鬼のお願いは何か聞くと鬼は、

「鬼ヶ島の鬼に復讐して欲しいのです。」

と言った。

鬼は桃信の力があれば鬼ヶ島の鬼も倒せるのではないかと思い、頼んできたという。

鬼は

「もし桃信さんが鬼ヶ島に行ってくれるのなら、ぼくを桃信さんのお供にしてください。」

と言った。

桃信は桃太郎の無念を晴らすためにも鬼ヶ島へ行くことを決心した。

それから二年後、桃信と鬼は山奥での修行をこなし、鬼ヶ島へ行く事にした。その前に桃信は春

からきび団子をもらって心を構えた。

鬼ヶ島へ向かう途中、桃信は鬼になぜ三年ほど前からあれほどまで良い体格を持っていたのかを聞いた。すると鬼は桃信に少しでも近づくためにずっと山奥で修行をしていたらしい。

そして鬼ヶ島についたが鬼が見当たらない。しばらく捜していると、草むらから何か食べるような音が聞こえた。

そちらの方を見ると一体の鬼が他の鬼の腹を笑いながらかじりついていた。

その鬼が桃信に気付くと、

「おお人間と…鬼がなぜ一緒にいる。」

と言った。

桃信は、

「お前に復讐するためだ。」

と答え、刀を構えた。

鬼は全く動じず、

「にしても人間、お前は桃太郎の孫だろう。顔立ちが似ている。お前の爺ちゃん、馬鹿なのに凶に乗っちゃって：笑えただぜ。」

と言った。続けて、

「この島の鬼は皆食っちゃった。これから人間が住むところに行こうと思ってたんだ。」

とにやけながら言う。

桃信は怒りでたまらずに鬼に切りかかった。それに続けてお供の鬼もその鬼に殴りかかった。

その鬼は攻撃を避けていたがお供の鬼の拳が腹に勢いよく当たり、足がよろめいたところに桃信が刀を振り下ろし鬼の体を裂いた。

その鬼は地面に倒れ込み、全く動かなくなった。お供の鬼が動かなくなったことを確認して、桃信のほうを向いたとき、倒れた鬼がお供の胸を手で貫き、その心臓を握り潰した。

お供の鬼は倒れ、動かなくなった。

桃信は貫いた腕を切り落とし、鬼に、

「お前の目を抉り出し、腹を裂き、四肢をもぎ取ってやる。」

と怒りをあらわにした声で言った。

鬼は、

「そうだ！そんな顔が見たかった！」

と笑いながら言った。

桃信はその鬼の体を刀で滅多刺しにし、原形も残らぬほどに穴をあけた。

桃信はその後、お供の鬼を土に埋め、手を合わせて家に帰った。

桃信は涙ぐんだ目で家の戸を開け、春に鬼ヶ島の鬼を倒したことを伝えた。

しかし桃信は、

「僕は一つ命を奪ってしまった。それに仲間を守ることもできなかった。」

と泣きながら言った。

春は、

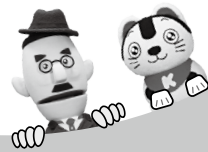
「戦場での命は守れなかったとしても、これから奪われるかもしれない何百もの命をあなたは守れたの。だからあなたが負い目を感じる必要はないわ。」

と桃信を励ました。

その晩、春は桃信の好物のきび団子をいっぱい作って、桃信と一緒に食べたのでした。



【高校生の部】





【大賞】

サニーマのスケッチブック

福山暁の星女子高等学校 1年

岸本 きしもと ひかり

僕はまあまあ幸せな動物園のゾウ、サニーだ。
でも本当は退屈なんだ。

動物園にはやさしい飼育員さんがいて、おいしいご飯をくれる。ブラシで体だって洗ってくれる。それに、柵の向こうには子どもたちがいて、みんな僕に手を振ってくれる。友だちだっている。この動物園のもう一匹のゾウのケ빈はいつも僕と遊んでくれる。

それでも僕は退屈なんだ。
毎日毎日この狭い柵の中、同じ景色。

僕はケビンに、

「いつかこの動物園を飛び出して、故郷の広い草原を自由に走り回るんだ。疲れたら水浴びをして、真っ赤な夕日を眺めながら眠る。楽しそうだと思うわない？」

と言った。ケ빈は、

「その話何回目？」と笑うけど、僕は今日も夢を見るんだ。

ある日僕は、一人の女の子が近くのベンチに座っているのに気づいた。最近よく見かけるエマだ。大事そうに胸に何かを抱えている。僕が、

「面白そうなものを持っているね。」

と声をかけると、エマはニコツとして駆け寄ってきた。

「スケッチブックと絵の具を買ってもらったの。」

「どうやって遊ぶの？」

と訊ねると、エマは真っ白なスケッチブックを開いて、

「おもちゃじゃないよ。」

と、何かを描き始めた。

しばらくすると、

「できたっ。」

と言って、描いた絵を見せてくれた。エマが描いてくれたのは、僕の大好きなりんご。

それも画用紙いっぱい大きな大きななりんご。

「りんごはこんなに大きくないよ。」

と言うと、

「絵は自分の好きなように描いていいのよ。サニーが空を飛ぶことだってできるの。」

と、エマは大きな翼で空を飛ぶ僕を描いてくれた。絵の中の僕は笑っていて、とても気持ち良さそう
だ。僕は思わず、

「僕にも描ける？」

と訊ねたけど、エマは、

「サニーは私みたいに筆を持たないのにどうやって描くの？」

と少し悲しそうに答えた。確かに、と僕はがっかりした。

エマはまたベンチに座って、スケッチブックを取り、新しい絵を描き始めた。今度は僕を描いているようで、僕の自慢の鼻を描いてくれている。すると突然、エマは、何かひらめいたような顔をして立ち上がり、

「サニー、やっぱり絵を描けるよ！」

と言った。僕は不思議に思って、エマが何を思いついたのか訊ねたけど、

「待ってて！」

とだけ言ってスケッチブックと絵の具を持ってどこかへ行ってしまった。

六人の子どもたちと遊んであげて、三組の家族と写真を撮った頃、エマが走って戻ってきた。今度はいつもの飼育員さんも一緒だ。飼育員さんは、エマのより大きなスケッチブックを持っている。すると、エマは持っていた筆を僕に見せて、

「サニーは私みたいな手は持っていないけど、私にはない長くて器用な鼻があるわ!」

と言った。よく見ると、細い筆には、木の枝がテープで十字に付けられていて、僕の鼻でも持てそうだ。本当に僕の鼻で絵が描けるのか心配だったけれど、とつてもわくわくした。

しばらくすると、飼育員さんが柵の中に入ってきた。大きなスケッチブックとパレット、カラフルな絵の具、そして特製の筆を持っている。

さっそくスケッチブックが木の台にセットされ、飼育員さんが筆を渡してくれた。

僕は慎重に筆に絵の具をつけて、思い切って描

き始めた。最初にピンクの丸を描いた。次は緑の線。その次は黄色い点々。僕はゆっくり、でも夢中で描いた。最初の一枚は、そばで見たいと思っていた。柵の向こうのかわいい花だ。エマは目を輝かせて、

「サニーすごい!もつと描いて!」

と僕の絵を見ている。

絵を描くってこんなに楽しいんだ。柵だって乗り越えられる。もつともつと描きたい!

絵に出会ってから、僕はエマと一緒にたくさん絵を描いた。

あるときは、エマがきれいなひまわりという花を持ってきてくれて、ヒマワリの絵を描いた。あんなに大きな花があるなんてびっくりした。だって、エマよりも大きかったんだ。またあるときは、一緒にケビンの絵を描いた。ケビンに見せると、

「これが僕かい？案外かっこいいね。」

なんて言うから、三人でいっぱい笑った。

二人のスケッチブックはあつという間に埋まっていて、残りは最後のページ。

エマは、

「新しいスケッチブックを買ってもらわないかね。」

と言って、僕とエマが今まで描いた絵を見せてくれた。僕が一番のお気に入りはやっぱ、エマが初めて描いてくれたあの大きな大きなりんご。

「このエマの絵のりんご、すごくおいしそうだな。」

と僕が言うと、

「絵は食べちゃダメだよ。」

って言われちゃった。

「それよりも、最後の絵はどうするの？」

とエマに訊ねられた。

僕は言おうかどうか悩んだけど、

「実は描きたいものがあるんだ。聞いてくれるかい？」

と言った。

「もちろん。聞かせて！」

と言ってくれたから、話してみることにした。

「僕には夢があつてね。いつかこの動物園を飛び出して、故郷の広い草原を自由に走り回るんだ。疲れたら水浴びをして、真っ赤な夕日を眺めながら眠る。もちろん無理なのは知っている。でも、一度でいいから、その景色をもう一度見て、スケッチブックの最後のページに描きたいんだ。」

ボクの話聞いたエマは、

「すてきな夢だね。」

と言ってくれた。

「でも、何で無理だと思うの？」

僕は驚いた。

「何でも言われても、僕は動物園のゾウだ。遠く離れた故郷まで行けるわけじゃないじゃないか。」

と言うと、

「絵は自分の好きなように描いていいの。本当に行けないのなら、絵の中で行けばいいのよ。絵の中は自由なんだから。」

ケビンも、

「僕にも君の故郷を見せて。」

と言ってくれた。

僕はスケッチブックの一番最後のページをゆつくりと開いた。

真っ白な紙に真っ赤な絵の具で描いたのは、真っ赤に燃える故郷の大きな夕日。それを見ている影は、僕とエマとケビン。

僕はとうとう夢を叶えたんだ。

僕は故郷を思い出してパオーンとひと鳴き。描き終えた絵を見たエマはうつとり眺めて、

「サニ一の故郷の夕日は真っ赤っかだね。私にも見せてくれてありがとう。」

と言った。

僕は嬉しくなって、もうひと鳴き。ケビンも一緒にもうひと鳴き。

僕は本当に幸せだ。もう退屈なんかじゃない。

明日は何を描こうか。

僕は遠い故郷の大地と家族を思い浮かべた。



【佳作】

ぼくらのほなし

大分県立玖珠美山高等学校 1年

しゅくり
宿利 美湖

冬休みのある日、風くんがふとこんな事を言い
だしました。

「ねえねえ、神社の裏の森に大きな神木があるん
だけど、その近くに誰も使っていない秘密基地が
あるの知ってる？」

小学三年生の、旭日くんと風くんと蛭くんは塾
の帰りにいつも寄っている駄菓子屋さんでお菓
子を選んでいました。

「風、そんなの誰に聞いたの？」

蛭くんに聞かれて風くんはきょとんとした目
で、

「…え、僕どうしちゃったんだろう、わかんない、
何でだろ、いきなり浮かんできたんだ。」

と、言いました。

「そんな秘密基地あるわけじゃないじゃん、信じられ
ないよ。」

と、蛭くんが風くんに言いましたが、旭日くんは、
「面白そうじゃん！せっかくだから探検も兼ね
て探しに行ってみようよ。」

と、二人に言いました。

「そうだよ！いこうよ蛭くん！」

蛭くんは、戸惑っていましたが、旭日くんと風
くんは秘密基地と聞いたらわくわくが止まりま
せんでした。三人は、塾が休みの土曜日の朝、八
時過ぎに駄菓子屋さんに集合することにしまし
た。

当日、金曜日の夜、わくわくしすぎて眠れな
かった旭日くんはお父さんとお母さんよりも早い、

まだ外も薄暗い朝の四時半に起きました。リビングに行く、旭日くんのおじいちゃんである三朗じいちゃんがこたつに入り、湯飲みに入ったお茶を飲みながら新聞を読んでいました。

「三朗じいちゃんおはよう。」

「おはよう旭日、今日は起きるのがすごく早いなあ。」

三朗じいちゃんは、こたつの上にあるみかんを旭日くんにむいてくれました。

「旭日、今日は朝から遊びに行くそうじゃが、何をしに行くんだ？」

みかんを受け取った旭日くんは食べながら、小さな声でヒソヒソと話し始めました。

「三朗じいちゃんだから教えてあげるけど、ぜー！　ー　　誰にも言わないでね？　実は俺たち今朝から、神社の裏にある誰も使っていない秘密基地を探しに探検に行くんだ。」

三朗じいちゃんは、お茶を飲むのをやめ、こう言いました。

「旭日、朝や明るい時間に行くのはいいが、夜の森は絶対に行ってはならんかな？」

「そうなの？　でも僕たち夜に森になんて行かないし、大丈夫だよ。」

「暗くなる前に、帰ってくるんじゃないぞ？」

「わかったって。いつも通り、夕方の五時に鳴る帰りの音楽が流れたら帰ってくるから。」

それを聞いた三朗じいちゃんは安心したようでもまたお茶を飲み始めました。

「じゃあ、じいちゃん俺そろそろ出るね！　いってきます。」

「いつてらっしゃい。」

旭日くんが出た後、三朗じいちゃんはお茶を飲み始めたかと思うと、ふと何かを思い出したかのように手をとめ、呟きました。

「いかん、あの子のことを言うのを忘れておった……でも、大丈夫か、あれだけ時が経っておる、もうあそこにはいなくなっておるじゃろうな。」

早く起きすぎてしまった旭日くんは、集合時間よりも少し早めに家を出ることにしました。外はすごく冷えており寒くて、吐く息が白くなっていました。駄菓子屋さんにつくと、そこには風くんと蛭くんもいました。

「二人ともおはより、何でこんなに早いのか？」

「旭日くんこそ、何でこんなに早いんだよ。」

風くんも蛭くんも今日の探検が楽しみすぎて朝早く起きてしまったようです。早く合流してしまいました。早速、神社の裏の森へ出かけることにしました。三人は神社へと続く長い長い階段をのぼり、やつのことのぼり終わると、神社の参道に積もった雪を掃いていた神主さんに会い

ました。

「おはようございます！」

「おはよう、今日はお参りかな？」

「いいえ、僕たち今日森で遊ぼうと思ってきました。」

「遊ぶのはいいけど、怪我しないようにな、あと、暗くなる前に帰るんだぞ？ここの森は昔から夜になると、人為らざるものたちが集まり、森の中を徘徊していて、人間を見つけると襲ってくると言われておるから。」

『ひとならざるもの』？なんですかそれ？」

「こわいお化けだ。」

「え、嫌だよね。」

「風、大丈夫だって、俺と旭日でそんな奴倒してやるからよ！」

三人は神主さんに挨拶をした後、ずんずんと森の中へと進んで行きました。

「神木ってどこにあるんだろ〜ね〜。」

「蛍ちゃん知らないの?」

「神木? 知ってるよ、この道を真っ直ぐ進んだらあるはず。去年さく兄ちゃんとお正月に、初詣と兄ちゃんの高校の合格祈願に来た時歩いたから覚えてる。」

蛍くんには、高校一年生の『朔空くん』というお兄ちゃんがいます。

「あっ! あった!」

蛍くんという通り、まっすぐ進んで行くとなとも太く大きなご神木が立っていました。旭日くんは、キラキラ輝いた目で、

「この近くに、秘密基地があるってことだよねー?」

と、辺りをぐるぐる見回しました。

「二人とも、もしかしたらっ、もしかしたらだよ? 秘密基地なんてホントはないかも知れない

のに。」

「わかってるって、でもせっかくだもん、ほら蛍も探そう?」

三人は分かれて秘密基地を探し森の探索を始めました。しばらく時間がたった後、蛍くんの大声が聞こえてきました。あわてて、旭日くんと侃くんは声のする方へ行くと、そこには三人の背丈より少し大きな手作りの小さな小屋がありました。木板と釘だけの簡単な作りでしたが、とても丈夫です。扉の入り口には、看板があり何か書かれています。文字が滲んで読めません。中へ入ると、読みかけの漫画雑誌や、食べかけのお菓子の袋などがそこらじゅうにありました。

「わ〜! ほんとにあったじゃん! 侃すごいよ! 蛍ちゃんよく見つけたな!」

旭日くんと侃くんと蛍くんは早速この小屋を秘密基地にしようと片付けを始めました。最初は

とても汚かった秘密基地ですが、三人は力を合わせて綺麗にし、持ってきたお菓子や漫画、歩いているときに拾った木の棒などを置いたりして、立派な秘密基地に仕上げました。そして、ふと気づくと、空はオレンジ色に染まり夕方になっていました。

「僕ら、そろそろ帰らないとだね。夕方の音楽鳴り始めちゃう。」

「そうだな、お母さんに怒られちゃうしな。」

二人が帰る準備をしていると風くんが、

「明日、日曜だからさ、また集まろうよ！三人でゲームしよう。」

と、言い、三人は明日も秘密基地に集めることにしました。

翌日、旭日くんは準備をして、急ぎ足で秘密基地に向かいました。秘密基地につくと、風くんも蛭くんもまだいなくて森の中はシーンと静まり

返っていました。二人が来るまでに何をしようかしばらくボーっとしていると、小屋の中からゴトゴトツ。というような音が聞こえました。もしや、動物でも入ってしまったのだろうかと思った旭日くんは、中を覗こうと秘密基地のドアをそっと少し開けました。中を覗くとそこには知らない男の子が中で寝そべりながら漫画を読んでいるではありませんか。男の子は三人と変わらないほどの年の見た目です。中に人がいることに驚いた旭日くんは、わあっ！と、声をあげ尻餅をついてしまいました。それに気づいた男の子は旭日くんのほうを見るとニヤリと笑ってこちらに近づいてきました。

「やあ、こんにち。ここは君の秘密基地なの？」

男の子があまりにもフレンドリーなのに、言葉を失って何も言えなくなってしまう旭日くんは、男の子と目を合わせたまま黙り込んでしま

ました。そして男の子は尻餅をついてしまった旭日くんの手を差し出して腕を引き上げ、起こしあげてくれました。旭日くんは、ハッと我にかえって、

「ここは、誰も使っていないはずだけど、どうしてここにいるの?」

と、男の子に聞きました。

「僕は、この秘密基地を昔から知っているんだ。長いこと誰も使ってなかったから汚くなっていたんだけど、君たちが綺麗にしてくれたんだ、ね?」

男の子は旭日くんの後ろに視線をやりながら言いました。それに気づいた旭日くんは後ろを振り向くと、そこには蛍くんと風くんがいました。

蛍くんは不審そうな顔で、

「旭日、この子誰なの?」

と、言いました。

「俺もわからないんだ、君は誰なの?」

男の子は、にっこりと微笑みながら三人の方を見て言いました。

「僕は識、よろしくね。この秘密基地は元々僕のものだったんだけど、しばらく使っていなかったから汚くなっていたんだ。それを君たちが綺麗にしてくれたんでしょ?ありがとうございます。お礼にこの秘密基地、君たちも使っていいよ。」

「…なんだ?こいつ、いきなり現れたかと思えば、自分は使ってなかったのに、見つけて綺麗にした俺たちに使っていいよだって?なんて偉そうなやつなんだ。」

蛍くんは識の態度に腹が立ってしまい、怒り出してしまいました。

「俺たちも勝手に秘密基地にしようなんて言い出したのが悪かったんだ。そう怒るなよ。」

旭日くんは蛍くんを宥めるように言いました。

「ごめんね、識くん。僕たち勝手に入っちゃった
りして。」

「いや別に君たちは悪くないよ。僕も初対面なの
に馴れ馴れしくしちゃってごめん。でも僕、君た
ちと友達になりたいんだ。あと確か蛭くんだよ
ね？仲良くしてくれたらうれしいな。」

ニコニコと笑いながら識は言い、蛭くんはそれ
に呆れたかのように、

「ごめん、俺も初めて会ったばかりなのにいろい
ろ言っちゃったりして。俺たちでよかったら仲良
くしてくれ。」

と、少し緊張気味ながらも言いました。

秘密基地に識が現れて、最初は怪しくて変なや
つだな、と思っていた三人でしたが、秘密基地で
ゲームをしたり、外で雪合戦などしたりして、仲
良くなっていききました。識と出会ってしばらくの
日を重ね、過ぎていき、気づけば大晦日の前日に

なっていました。秘密基地では、神社で行われる
初詣について話し合いが行われていました。

「今年は、識も初詣で大晦日の夜、神社で会える
よな！！」

「僕ら、いつも大晦日の夜、家族で神社に行っ
てお参りしてるんだ。」

「その時にいつも合流してゲームをしたりする
んだよ。」

「負けたら、極寒の中アイスクリーム食べる罰ゲ
ームとかしたりなく、いつも風が負けるけど！」

「うるさいなあ、ねっ、識くんも来るでしょ？」

識は少し考え込むと、

「僕、神社には行けない。でも、秘密基地に三人
が来てくれるなら遊べるよ。」

「神社に来れないの？じゃあ、秘密基地に集まる
か。」

「二人とも待ってよ、夜だし、お父さんとお母さ

んが見えるところにはないと叱られちゃうよ。」

三人とも少し考え込みました。

「…あ！思いついた！」

「え、蛭くんになに？」

二人は、蛭くんの方にザッと寄りました。

「そんな見んなよ、恥ずかしいじゃん。」

「気にすんな！んで、なんなんだよ蛭！」

蛭くんは、少し呟き込む真似をすると、自信あ
りげな顔で言い始めました。

「まあまあ、落ち着け、いい作戦がある。」

しばらく話し込むと、

「えーそんなことして怒られないの？」

「ほんとだよ！バレたらどうすんだよ！俺、一生

お菓子無しの刑にされちゃうじゃん。」

「お菓子無しの刑って、ははっ、バレないって！

大丈夫だよ、親が帰ってくる前に寝てればいいん
だから。」

「ほんとかな。」

三人が口論している間、識は自分に会いにくる
ためにここまで話し合ってくれているのに嬉し
くなって、少し微笑みながら話を聞いていました。
「よしっ！作戦はこれでオーケー！んじゃ、明日
その予定でよろしく、なんかあったら俺ん家の電
話にかけてこい。」

「了解！蛭ん家ね。」

大晦日、三人は作戦を実行しようと準備をいろ
いろしていました。蛭くんが考えついた作戦とい
うのは、親に神社には行かず今年は寝ておくとい
うことをいい、家族が外出している間に秘密基地
に行き、家族が帰り着く前に寝床についておくとい
う作戦です。

そして夜、決行の時間になりました。三人の家
族は初詣に神社へ向かったようです。ですが、こ
こで蛭くんの家に『なんかあったらの電話』がか

かつてきました。

「もしもし、こんばんは、小鳥遊です。どちら様ですか？」

「あ、もしもし、こんばんは、五十嵐です…。」

「え、旭日、だよ、な？どうした？なんかあった？俺ん家に、そろそろ風来るから今から家でするけど。」

「それがさ、行くのが難しくなりそうなんだよ。」

「なんで？何か問題が起きたのか？」

「…うちの三朗じいちゃんが家に残っちゃったんだよ。」

「えー！？あ、風いいところに！旭日、今風来たところ。」

「ん？蛍ちゃんどうしたの？電話は、旭日？」

「風ー！それが、かくかくしかじかでさー、どうしよう。」

「……おじいちゃんに言ったほうがいいんじゃない？」

「風、それ本気!？」

「うん、確信はないんだけど、なんか三朗じいちゃんなら納得してくれそうな気がするし…。」

「でも、じいちゃん絶対ダメって言うと思うんだよ。」

「旭日！今から僕たち旭日ん家行くからそれまでには説得しといてね！じゃ、切るよ。」

「え、まじかよ。」

旭日くんは一人困ってしまいました。三朗じいちゃんに怒られるかもと悩んでしまっています。

「旭日、じいちゃんに話があるのか？聞くぞ。」

「え…じいちゃん…!？」

三朗じいちゃんが旭日くんたちの会話を聞いて話しかけてきたのです。ですが旭日くんは、
「…ごめん！じいちゃん！俺、ちょっと用があっ

て……！」

「待てっ！旭日！どこに行くんじゃ!?」

旭日くんはおじいちゃんが許してくれないと思っ
て、怖くて逃げ出してしまいました。

「……あ！旭日！説得できたのか？」

凧くんと蛍くんが家の近くまで来ていたので
す。

「お、おう、当たり前じゃん！じいちゃんすぐ許
してくれたぜ！」

「よかった、じゃあ行こ。」

旭日くんは二人に嘘をついていました。

秘密基地に向かい、小屋に入ると、識がニコッ

とした顔で迎えてくれました。寒空の中でしたが、
識たちは外で雪合戦や、かくれんぼをしたりして
遊びました。識は、雪玉を作るのが上手く、投げ
るのも上手、かくれんぼは、いつも隠れるのも見
つけるのも上手です。四人は時間が過ぎるのを忘

れるかのように遊び続けました。しばらくすると、
表の神社からゴーンゴーンと除夜の鐘の音が鳴
り始めました。

「識、僕たちそろそろ戻らないと、みんな帰る時
間になっちゃう。」

識は、いつものにつこりとした顔とは裏腹に寂
しそうな顔になってしまいました。それを見た凧
くんは、

「まだ、いいんじゃないかな？きつとうちの親達
だって話しているのに夢中でまだ帰らないと思
うし、もしものためにぬいぐるみも置いてきたし
……。」

と、二人に言いました。

四人は遊び続けることにし、鬼ごっこで遊び始
めました。しばらく遊んでいると、凧くんが何か
に気づき、青ざめた顔でそっと蛍くんに話しかけ
てきました。

「蛭ちゃん、僕の見間違いかもしれないんだけどさ、さっき鬼やってた時、僕、走り疲れちゃって下を向きながら走ってたんだ…。暗くて見えにくかったし、違うと思うんだけど、識くんの…。」

「ん？ 識の？」

「……あ、足が無いように見えたんだ…。」

「え!？」

「見間違いかと思うんだけど、もしかしたらお化けなんじゃないかと思って…。」

「そんなはず、ないだろう。」

「でもさ、神主さんが言ってたじゃん？ この森は人為らざるものがない、夜に徘徊するって。」

「でも、あいつ昼間俺らと遊んでたじゃん？ お化けって夜に出るもんなんだろう？」

と、後ろから、旭日くんが話しかけてきました。

「旭日の意見も一理あるけど、風の意見も一理ある。俺もさっき足が無いように見えた時があった

から。」

三人は、一氣にここにいること、そして識のことが怖くなってきてしまいました。今思うと、どうして識は神社には来れないと言ったのか、なぜ昔から秘密基地を知っているのか、住んでいる場所は、家はどこなのか、彼は何歳なのか……彼は本当に人間なのか、わからないことはたくさんありました。ですが、三人は聞かないようにしてききました。いや、聞けなかったのです。気づきたくない反面、知りたいという好奇心もありましたが、このまま識と仲良くしていきたいという気持ちと、知ってしまったら自分たちがどうなってしまうのか怖くて聞けなかったのです。遠くから識の声が聞こえてきました。

「三人ともどうしたの？ 鬼ごっこ止まっちゃったよ。」

三人は、思い切って識に聞いてみようと思いま

した。

「識、俺たち話があるんだけど。」

「…なに？」

識はいつもの笑顔で聞いてきました。

「さっき、君の足が無いように見えちゃったんだけど、君ってさ、もしかして昔からこの森に出るって言われてる『人為らざるもの』お化けだったりする？」

識の顔からは笑顔が消えていました。

「はは、油断しちゃった…。三人とも気づいちゃったんだね、そう、僕実は、ずーっと前に死んじやってるんだ…。」

四人の中に冷たい空気が流れました。識は、暗い顔で、涙を流し、泣き出してしまいました。そしてどんどん青白くなり、少し透明になりました。「やっぱり、識はお化けだったんだね。」

「…ごめん、今まで騙してて、僕三人と遊ぶのが

楽しくて気が抜けちゃって、体を実体化させる力が弱まっちゃたみたい、きつとそのせいでさっき足がないように見えただね。」

「識…。」

「本当にごめんね、僕ももう二度と三人の前には現れないから。」

「待って!! 識! 僕たち別に識くんになくなって欲しいとは思ってないよ!。」

「…じゃあ、これからも友達のままでもいいの?」

「当たり前だろ! 俺ら友達じゃん!!」

「ありがとう…僕ね、三人と仲良くなれてよかった、友達になれてうれしかった。」

そういうと、識はスウツとどこかに消えてしまいました。三人は頭が真っ白になりました。

「とりあえず、ウチへ帰ろう、みんなが家に帰っちゃうよ。」

「あのさ、俺結局じいちゃんに言えなくて黙って

出ちゃったんだ。」

「そう、か、まあ、そんな日もあるよな…。」

三人は、黙って家へと帰りました。

「僕と、遊んでくれてありがとう、さよなら。」

旭日くんが家に帰ると、三朗じいちゃんが玄関先で待っていました。

「旭日、いきなり家を飛び出すとは、なにがあったんじゃ。」

「ごめん、じいちゃん、でも理由は言えないんだ。勝手に飛び出したりしてごめんなさい。」

三朗じいちゃんは、何かを察するようにして、ほっとため息をつきました。そして、少し微笑みました。

「旭日、とりあえず中に入りなさい、もう何も聞かないから、安心しておくれ。」

「じいちゃん…ありがとう。」

大晦日の夜から、十日ほどがたったある日、三人はまた秘密基地に行ってみることにしました。三人はもしかしたら、という気持ちで秘密基地のある場所に行きましたが、御神木の近くを何度探し回っても、そこにはもう彼らの秘密基地も何もかもが無くなっていました。識のいた後何もなく、まるで最初から誰もここにいなかったかのようでした。三人はもしかしたらここ最近、識と遊んだ記憶はすべて夢だったのでは、幻だったのではと思い始めました。三人が黙り考え込んでいると突然、冬なのにも関わらず温かい風が吹いてきました。

「…あれ？どうして俺らここにいるんだろう。」

三人は、自分たちがなぜここにいるのかがわからなくなっていました。

「あ！一昨年さく兄ちゃんと来たところだ。」

「それこの前聞いたって、蛍、ちゃん……？」

「どうしたの旭日、今聞いたばかりじゃん？」

「え？あ、だって、識が……しき？……しきって誰だろ……？」

「旭日、どうしたんだ？」

「本当だよ。あ！蛍ちゃんそういえば僕、蛍ちゃんがサンタさんからもらったゲームやらせてもらってないよー？」

「俺、なにか、忘れてる気が……」

「旭日くんまだ、寝ぼけてる？」

「……ん……、確かにそうかもなりっ！……よしっ、ここから蛍の家まで競争だ！」

「あ！待てよ！ずるいっ！こら旭日！」

「二人とも、置いてかないでよー！」

三人は、神社のある方へと楽しそうに駆けていきました。

何十年も前のある冬の日、少年が木の上で一人深いため息をついていると、そこに三人組の小学生が通りかかりました。少年はその三人を見るやいなやニヤリと笑い……そして風が吹き、少年は去りました。すると、三人組の一人が突然立ち止まりました。

「さぶちゃんどうしたの？急に止まって。」

立ち止まった、その『さぶちゃん』と呼ばれた少年はゆっくりと口を開きこう言いました。

「神社の裏の森に大きな神木があるんだけど、その近くに誰も使っていない秘密基地があるの知ってる？」



【佳作】

たぬきのたぬたぬ

大分県立玖珠美山高等学校 1年

もり
かいと
森 海翔

むかしむかし、あるところにたぬきの集落がありました。その集落で暮らしていたのがたぬきのたぬたぬでした。たぬたぬは野性的な、そして面白みがなく、つまらない村の生活に飽き飽きしていました。そんなたぬたぬは様々な文化を形成して暮らしているニンゲンの生活に憧れていて、次第に自分もニンゲンに化けてニンゲンと共に生活をしたと思うようになってきました。そんなたぬたぬの思いは日に日に強くなり…。

たぬきの世界にも村の長というものはいるので、たぬたぬは村の長であるたぬ兵衛に『ニン

ゲンに化けてニンゲンと共に生活をしたい』という願いを相談しました。

「長、オレ、こんなつまらない生活はイヤだよ。オレはニンゲンに化けてニンゲンと一緒に生活がしたい。」

「何をバカなことを言っているんじゃ！ ニンゲンなんかと暮らしたって自然の中で生きてきた俺たちとは何もかも違う、生きていけるわけなんかない！ 第一、お前がたぬきだってこと、バレない保証なんか無いじゃろう。もしバレちゃったらお前は殺されちゃうだろうしな。」

たぬたぬは長の言葉に反論することができませんでした。たぬたぬは長の言葉を聞いても尚ニンゲンと暮らすことを諦めきれませんでした。しかし、また長に相談をしにいったところで許しを得られるわけではないことは、たぬたぬもわかっていました。そこで、たぬたぬは皆が寝ているうち

に黙って抜け出してニンゲンの暮らす村へ向かうことにしました。

たぬたぬは走って走って走って。。。見覚えのある村の場所に到着したと同時に「ボンッ」という音を立ててニンゲンへと化けたあと夜明けを待ちました。夜が明けるころ、たぬたぬは、『目が覚めたらこの近くで倒れていて、自分がどこからきて誰なのかもわからない。』という設定で村人に声をかけました。村人たちは、たぬたぬを不憫に思い、家主のいない古びた家で暮らすことを許可しました。やがてたぬたぬは、「楊五郎」を名乗り、村での生活にも慣れ、馴染んでいきました。

ある日、村で散歩をしていたたぬたぬは、立て掛けていた木材が村の子供めがけて倒れていく場面に遭遇しました。

「危ない！」

たぬたぬは無意識に子供を助けようと飛び出

して行きました。子どもに覆い被さって庇う形となったたぬたぬは、その衝撃によって変身が解けてしまったのです。

「おまえ。。。たぬきだったのか？」

ニンゲンたちにたぬたぬが、たぬきである事がバレてしまいました。たぬたぬは一目散に逃げ出しました。走って走って走って。。。いつの間にか別の村に着いていました。

たぬたぬは次に、各地を旅する浪人という設定でニンゲンへ話しかけました。やがてまたたぬたぬは村へと馴染み、ニンゲンと共に暮らす生活に戻っていきました。しかしある日の朝、たぬたぬは寝ぼけていたのか、尻尾を隠し忘れたままニンゲンに話しかけてしまったのです。

「おはよう、権左衛門。」

「オメエ、なんだ？その尻尾は。。。」

またニンゲンたちにたぬたぬが、たぬきである

ことがバレてしまいました。たぬたぬはまた、一目散に逃げ出しました。走って走って走って。。。そしてまたどこかの村へ着いていました。

たぬたぬは次に、イノシシに襲われ荷物を落としてしまった旅商人という設定でニンゲンへ話しかけました。やがてまたまた村に馴染み、ニンゲンと共に暮らす生活に戻っていききました。しかしある日の夜、たぬたぬは山へ山菜取りに出かけていた帰りで、とても疲れていたため変身の力が弱まり目の周りに黒い模様が浮き出ていました。

「ただいまー。たくさん採ってきたよ。」

「おかえり、っておいお前、なんだ、そのたぬきみてえな目は。まさかお前、たぬきか？」

またまたニンゲンたちにたぬたぬが、たぬきであることがバレてしまいました。たぬたぬはまたまた、一目散逃げ出しました。走って走って走って。。。いつの間にか別の村に着いていました。し

かしましたうつかりたぬきであることがバレて、また別の村でたぬきであることがバレて、逃げて、またバレて。。。

たぬたぬは長の言葉を思い出しました。『ニンゲンなんかと一緒に暮らしていけるわけがない』この言葉はたぬたぬの心へと深く刺さりました。たぬたぬはたぬきの集落へと帰ることにしました。走って走って走って。。。いつの間にかたぬたぬは最初暮らしていた村に着いていました。

「楊五郎？おまえ、楊五郎か？」

たぬたぬはニンゲンに見つかってしまいました。急いで森へ逃げ帰ろうとすると、

「待ってくれ！お前を害するつもりなんかない！ただ一言、お礼が言いたいんだ。あの時おまえは自分の正体がバレることも顧みずに村の者を助けてくれた。おまえが人間じゃないことがわかった今でも、俺たち村のみんなはおまえを村の

一員だと思っている。無理は言わない、だが俺たちともう一度村で過ごす気はないか？」

たぬたぬは考えました。長が言っていたようにニンゲンたちは自分を殺すつもりで騙そうとしているかもしれない。けれど、たぬたぬはニンゲンたちを、ニンゲンを信じてみることにしました。ここでニンゲンを信じなければ一生自分は変わらないし、またつまらない生活に逆戻りして一生を過ごすことになると思ったからです。

結果、本当に人間たちはたぬたぬを歓迎してくれて、たぬたぬは化けただけの偽りの人間としてではなく、本当の自分として、人間を愛し、人間に愛され、しあわせに過ごすことができたのです。

【選考委員特別賞】

鳥になって

大分県立玖珠美山高等学校 2年

原 はら 菜々子 ななこ

「家の前の空き地に、新しいお家が建つんだって。」

夕飯のエビフライを頬張る私にお母さんは言った。子供の頃、近所の友だちと集まってよく遊んだ空き地だ。昔は学校が終わると毎日集まって遊んだのに、今じゃ会ってもあいさつ程度。仕方ない。部活にテスト、友達付き合い。高校生だって時間に追われる日々だ。ゆっくり深呼吸もできない。行先のわからない猛スピードの列車に乗り込んでしまったみたい。

そういえばあの頃、この辺りに転校してきた男

の子がいたな。ほんの少しの間だけ。名前は…何だったかな…ススム…カナムくん…？確か一緒にタイムカプセルを埋めて…。

「タイムカプセル!!」

そうだ！あの空き地！みんなでタイムカプセルを埋めたんだ。どうしよう。工事が始まる前に掘り起こさないと。

でも…忙しいみんなに声掛けるのはな…。私はひとり、雑草が生い茂る空き地に足を踏み入れた。春にはお花見、夏には大きな日陰をつくってくれた桜の木が変わらず立っている。家が建つならこの木も切り倒されちゃうのかな…。埋めたのは確かこの辺り…。木の根元を少し掘ってみると、「ガン！」すぐに鈍い音がした。

子どもだけで埋めたタイムカプセル。すいぶん浅いところにあるけど、よかった。今も静かにここにある。

錆びついた缶を開けてみる。ビニールに包まれた人数分の封筒。そうだ、みんな得手紙を入れたんだ。何を書いたんだっけ…。

「あつた！私の名前。」

思い思いの封筒の中に、幼い自分の文字。少しワクワクしながらテープをはがすと、「ひゅんっ」という音と共に、強い光に包まれた気がした。

「あれ？」

うつすらと開けた目に、細く虹色の光が差し込んでくる。優しい光と心地いい風。花のいい香…。どこ？ここ。とても気持ちのいい場所だけど、見たこともない景色。

「いらっしやい。」

「だ、誰？」

振り向くと、小さな少年が立っていた。

「ここは夢語りの国。君は少し夢不足のようだから、僕の国に招待させてもらったよ。」

「え…夢不足…？」

「そう。少し疲れて夢を持つことを忘れてしまった子に、深呼吸をしてほしいんだ。」

「君はどうして、夢の見方を忘れてしまったの？」
何だろう、この子は。突然、夢、夢って！だって毎日忙しいし、いつまでも子供じみた話をしてたら友達に笑われる。夢を語ってバカにされるって辛いじゃない。もうそんな子供じゃない。

「私、帰る！帰してよ！」

「もちろん。簡単さ。あそこの丘で、君の夢を叫ぶだけ。大きな大きな声でね。君が僕に教えてくれた夢。」

「あ！あなた…カナムくん!!」

「やあ。むかし一緒に遊んだね。僕のこと思い出してくれてありがとう。」

「むかし、君たちからこぼれ出る夢の種を持ち帰って、僕はこの国を作ったんだ。大切に育

てて、今ではこんなに夢の花でいっぱいさ。」

「夢の種？」

「そう。たくさん種の種をくれた君たちに、ずっと恩返しがしたかったんだ。あの頃を思い出して。」

夢……。そうだ、あの空き地、毎日みんなで遊びながら無邪気に夢を見てたな。自分は何者にでもなれる、自由な夢。

「まだ間に合うかな……？」

「今からだって遅くないでしょ？君の夢はいつでも叶えられる。夢見ることさえ忘れなければね。」

そうだ！大切なのは自分を信じること！

「カナムくん！私、思い出した！」

「丘へ行こう！」

ふたり手を繋ぎ、夢の花が咲く丘を駆け上がる。カナムくんが言った。

「この夢の種を、今度は君が、君の世界中に撒い

て！」

「まかせて！きつと叶えるよ！また会おうね！！」
私はあの頃の夢を、自分でも驚くほどの声で叫んだ。

『—————！！』

「朝よー。起きなさいい。」

夢!?いつものお母さんの声にベッドから跳び上がる。枕元には虹色の夢の種とあの封筒。あの夏、みんなと一緒にタイムカプセルに込めた希望が入ってる。

封筒をそつと開く。そこには小さな私の大きな夢。

『鳥になって空を飛びたい』

さあ！鳥になって、世界中に夢の種を撒きに行こう！

【久留島武彦記念館 館長特別賞】

ホース

名古屋市立富田高等学校 2年

荒川 智哉
あらかわ ともや

乾いた風が地面を駆ける。砂が巻き込まれあちこちに砂ぼこりを作っていく。

人の気配を感じない荒野に一頭の「クマ」が荷車と共に力強く歩みを進めている。手は前方の取っ手を掴んでいる。荷車はクマの大きさに合っていない。荷台と取っ手との間はクマの腹回りと同じくらいであるが、今は幾分余裕があるようだ。

荷台にはホースが沢山丸められている。黒の塗装が剥がれ砂ぼこりに打ち付けられていく内に、ホースは大蛇のような見た目になっていた。

一見このクマは荷車を使ってホースを運んで

いるかに見えるが、荷台の後ろからホースが地面に垂れていつている。どうやらホースを使って「水」を運んでいるようだ。その姿は人間のようなものである。

この地に住む動物たちは、人間の真似事をして国を持っている。それは以前この地を豊かにしようとして乗り込んできて、失敗に終わった人間が残した「住居」が可能にした。乾季の時期は過酷な環境が続くが、動物たちは仲間同士で自分たちの国を守っているのだ。

クマの歩く先には囲いとその向こうには住居の屋根が見えつつあった。クマは荷車を止めて囲いに貼られている看板を見つけた。

「インパラの国」

クマは笑みを浮かべた。そして再び荷車を引くと、先ほどよりも速く歩を進めた。

「入国許可証をお見せください。」

そう言ったのは顔にゴーグルをつけたインパラだった。国に入るときには、事前に入国したい国の王に入国許可証を発行してもらわなければいけない決まりがあった。

だがクマは荷車の取っ手から手を離そうとはせず、こんなことを口にした。

「私は水の使者だ。」

すると、ゴーグルをつけたインパラはクマの顔をじっと見て、

「噂はかねがね聞いています。少しお待ちください！」

そう言うと、門の奥にある建物に入っていった。次に建物から出てきたのは別のインパラだった。

そのインパラの手足は太く、角は鋭く尖っていた。先ほどのインパラよりも大分強そうであった。だが、国境警備にふさわしい体を持つこのインパ

ラでさえも、クマの大きな体には到底敵いそうになかった。

「私の名前はドールです。今から宮殿にお連れします。」

そう言われたのでクマは門をくぐった。街が壁に囲われているからか、砂ぼこりが減ったように感じた。

「実は我々、水の使者がやって来られたら宮殿へ連れて行くという命令を王様から受けていたんです。来ていただいて光栄です。」

クマは嬉しくなって胸をそらせた。水の使者は突然やって来て、乾いた地に水を届けに来るということがこの辺りで噂されている。インパラの国王も噂を信用して、クマが入国許可証を見せることを免除するようである。

「……作戦成功」

どこからか声が聞こえた。それがちょうどクマ

が身震いをして体についた砂を落とした時だったので、ドールは疑問に思ったものの気のせいだと思うことにした。

「では宮殿に案内します。」

「うん。よろしく頼む。」

クマとドールは歩き始めた。

「ここが宮殿です。宮殿は国の出入り口から一番奥に作られているんですよ。」

クマは意外に宮殿までの道のりが短いことに少し驚いた。でも、インパラにとっては長い道のりなのかもしれないとクマはふと思った。

「宮殿の中に入ると家来がいるはずなので、お声がけください。」

後ろを向いて歩き始めたドールを見て、クマはドールを呼び止めた。

「ドール。案内が丁寧だったから帰りもお願いし

たい。」

「ありがとうございます。ここでずっと待機します。」

ドールは笑みを浮かべた。クマは荷車の取っ手を地面に置いて、荷台と取っ手との隙間から出たすぐに宮殿の階段を登り始めた。その足取りは先程よりも軽く見えた。

「どこまでもホースが伸びていますね。あなたは魔法を使えるのですか。」

インパラの国王は執務室の窓から見えるホースを眺めた。ホースはクマの通った道のりと共に伸びている。

「面白いご冗談を。まさか魔法なんて使えませんよ。」

すると、部屋に二頭のインパラが入ってきた。手に大きな椅子を持っている。前足を器用に使用して椅子を浮かせて運んでいる。椅子は薄汚く、ず

つと倉庫にでも入れられていたように見えた。

「座ってください。我々は椅子が必要ないですから。」

「では、座らせていただきます。」

クマは王に微笑みながら座った。椅子を運んできた二頭のインパラは、前足を少し重たそうにしながら部屋を出て行った。クマはその様子を内心面白がって眺めていた。

すると、クマは王が自分を不思議そうに見ていることに気が付いた。窓から離れ部屋の中央の机に移動しても尚、王の視線はクマに固定されていた。

「椅子に座ったことはありませんか。」

クマがそう尋ねると、王は意外なことを口にした。

「そういえば、あなたはクマの国では普段どんな生活をしているのですか。」

クマは王に自分が怪しまれているのかもしれないとふと感じた。なので、クマは、

「普段は宮殿に家来として住まわせてもらっています。ですが、乾季の時期は苦しむ動物たちが多いので水を運んでいます。」

と言ったが、王の疑念は簡単には晴れないようで、しばらく質問が相次いだ。

「シマウマの国に水を届けたということは、シマウマの王から会談の時に聞きました。他に訪れた国はあるのですか。」

「サイの国、ゾウの国、キリンの国ぐらいですね。」

「草食の動物の国ばかり行っているようですが、何か理由があるのですか。」

「……肉食の動物たちは作物を食べません。でも、草食の動物は作物がないと生きられない。その作物は水がないと育ちません。だから私は今インパラの国にいるのです。」

クマは疑念が晴れるよう、熱心に説明をした。それと共に、この国の王は今まで訪れた国のどの王よりも洞察力があると感じた。角はドールより鋭くないが、見た目ではない部分に強さがあるように見えた。

王はクマの話を聞いて黙った。しばらく考えて話が腑に落ちたのか、静かにそつと口を開けた。「ごめんなさい、世間話が長かったですね。周りの国よりは小さいですが、見捨てずに来てもらい感謝をします。宮殿の裏に湖があるのですが、噂の『ホース』を使って水を恵んでもらえますか。」

「はい、もちろんです。」

クマは自分の疑念が晴れたに違いないと思い、嬉しくなった。

「元々、この国には湖はありませんでした。ですが、国民を豊かにする為に湖と水路は必要だと思い、宮殿の裏に作らせました。湖へ行くには宮殿

の中を通りますが、ホースの長さはまだありますか。」

「はい。まだほかの国へ行く分まであります。さっそく始めましょう。」

「お願いします。」

先程クマの元へ椅子を運んだ家来がクマの後ろをついていき、荷車のある宮殿前までやって来た。

そこにはドールが待機していた。想像よりも早い帰りに驚きながら、ドールはその場所から立ち上がった。だがクマと家来たちが荷車を宮殿へ運ぼうとするのが分かると、少し恥ずかしそうにしながら、またその場に座り込んだ。

「宮殿の中にホースを通して本当に良いのか。」

クマが家来に向って尋ねると

「はい。湖へつながる広い道は宮殿の中の廊下し

かありませんから。そうだよね。」

「あ、…はい。」

「湖の周辺部に水路がいくつか作られていて、そこから国民に水を運んでいるんです。」と話した。

二頭の内、口数が多い家来はもう一方の家来よりも体が一回り大きい。どうやらそのインパラは話をするのが好きらしく、今度は自分からクマに質問をした。

「ところで、この荷車から伸びているホースはどのように作ったんですか。」

「実は人間のものを拾った。」

「そうなんですか。確かに、この辺りは人間が残したもの、沢山ありますよね。」

家来は話を聞いてクマに親近感を持ったのか、こんなことを言ってみせた。

「水の使者という役目をされているけど、休憩が

てらに私たちを食べるって事はないですか。」

「ここにいる間は水だけで十分だ。」

家来は口に出して笑った。だが少し安心していうようにも見えた。

「湖につきましたよ。」

小柄な方の家来がそう言った。前方をよく見ると、そこには綺麗な円形の湖があった。一見水がまだ残っているように見えるが、傾斜のある地面が見えるということは大分水が無くなっていることを意味していた。繋がれている水路の近くに水はなかった。

王は他の家来と共に向こう岸にいて、クマと荷車を見ると軽く会釈をした。

「では、よろしく願います。」

王の声が聞こえた。クマのそばにいる家来は荷車から少し離れ、荷台のホースをじっと見つめた。

クマも王へ軽く会釈をした。

それからクマは荷台の横へ回り込み、太いホースへ手をつ込んだ。とても強い力で、大蛇のような見た目のホースをいとも簡単に持ち上げて横にずらしていく。荷台のどこかに隠されていたのか、気が付くとクマの手にはスコップと「蛇口」が握られていた。

蛇口を地面に置いた。スコップを使って何をすめるのかと思えば、握ったスコップでホースを垂直に一刺しした。そしてすぐに穴が開いたところに蛇口を差し込み、左の手でホースと蛇口を強く握った。

それから更に早業であった。クマはもう片方の手で自分の毛をつまんで一本毛を抜くと、ホースと蛇口の隙間に毛を糸のように結んで塞いだのだ。慣れた手つきである。そばで見っていた家来は目を大きく開かせた。

手を離しても、ホースからは漏れてこない。クマは立ち上がり、王に向かってこう言った。

「インバラの国に豊かさを。」

そして蛇口をひねった。蛇口からは始めちよろちよろと水が出たが、やがて滝のような勢いに変わり湖へどんどん流れていった。

そんな中、クマは荷車を再び宮殿の中へ押し始めた。二頭の家来たちは、湖が水で満たされるまでクマは帰ろうとしないと思っていたので驚いた。

「あの、もうお帰りですか。」

クマはすぐに振り返り

「次の仕事があるから失礼する。水がいっぱいになったら蛇口を閉めて。それまで不具合があるといけないから、宮殿中の家来を湖に集めてくれ。」
二頭の家来は輝かしい目をしながら会釈をした。向こう岸にいる王もクマがもう宮殿の出口へ

向かつて歩いていく様子を見て会釈をした。

「あ、良かった。お待ちください。」

クマが振り向くと、そこには王と一頭の家来がいた。一頭の家来とは、荷車を運ぶのを手伝った大柄な方のインパラである。

クマはもう少しで宮殿を出て行く所であった。そんな時に呼び止められて、何事だろうとクマは思った。

家来の角にはカバンがかけられていた。クマがそれに視線を向けると、家来は軽く笑みを浮かべて角を滑り台のようにさせてクマに渡した。

「どうぞ、お礼の品です。」

クマはお礼の品をもらうのが初めてのことであったので、顔が少しだけ熱くなった。それと共に、いつも湖や水路に水が満たされるのを待たずに帰っていく自分がふと思ひ出された。それには言

えない理由がある。その理由には裏切りの意味も含まれている。クマは手渡されたカバンの重みを感じながら、胸がじんわりと苦しくなるのを感じた。

「私はただ役目を果たしたただけなのでいりませんよ。」

すると王は家来を見ながら

「お礼の品を渡すべきではないか」とこのサトラーが話したのです。余っているもので申し訳ないですが、どうか受け取ってください。」

「：分かりました。ありがとうございます。」

「あなたが言った通りに湖に家来の招集命令を出しました。集まり出しているか見てきます。この度はありがとうございます。」

と話し、王の言葉にクマは嬉しさと共に、今からするつもりのことに対して大きな迷いが生じ始めた。

王は湖の方へ歩いて行っただので、クマの目の前には家来しがいなくなった。クマは家来を見て少し考え込み、こんなことを言った。

「サトラーとか言ったね。もし良かったら国の出口まで案内してくれないか。」

家来は驚いた顔を浮かべたものの、

「はい、喜んでお引き受けします。」

と言った。クマは何故こんなことを言ったのか、自分でもわからなかった。自分の欲を満たすためか、はたまた欲を抑えるために案内を頼んだのか。クマとサトラーは宮殿を出て、荷車を宙に浮かせながら階段を下り、ドールのもとへ向かった。

「お待ちしておりました。」

ドールがサトラーを不思議そうに見るのでクマは紹介を頼もうと思ったが、不思議そうに思っただのはサトラーも同じであった。

「私は家来のサトラーよ。国の出口までの案内を

承ったの。あなたは。」

「ドールです。初めまして。国境の警備をしています。私も案内を承っています。」

ドールとサトラーは互いに会釈をした。だが、ドールは案内が増えたことに納得していないようにも見えた。

だが出発すると、ドールとサトラーは打ち解け合っていた。

「国境の警備の仕事って難しいわよね。」

「不審者がいないか見分けるのは難しいよ。今は新人にやらせているけどね。」

サトラーは一瞬、ドールの太く鋭い角を見た。

サトラーは大柄な方ではあるが、ドールと比べると大分体は小さく見える。

先ほどから無口なクマは、心ここにあらずで「ある」ことをずっと悩んでいた。クマが静かな

ことを疑問に思ったのか、ドールはクマに話しかけた。

「そういえば、宮殿の前で待機している時に、水の音が大きく聞こえました。勢いがすごいですね。」

「あつ、乾季でも枯れない大きな湖から水を引いているから。」

「すごいですね。」

サトラーはそう呟いて荷台のホースを見つめた。ドールも荷台へ顔を向けた。すると、行きにはなかったカバンのようなものがあることに気づいた。尋ねようと思ったのだが、クマが話すタイミングがドールよりもほんの少しだけ早かった。

「周りに住居が多くあるのに全然生活感が感じられないな。」

するとサトラーが、

「奴隷の対象を拡大するという王の命令で多くのインパラが食肉用として他の国に輸出されたんです。国の豊かさの為には仕方なかったことなんです。…それで大切な人を奪われた家族は家に引きこもりがちになってしまっているんです。」と、少し口を重たそうに話した。ドールはサトラーの話に何度も頷いた。

一方のクマは、話の後荷車を引く速度を急に落とした。そのことは、クマの少し先を歩いているドールとサトラーにもすぐに分かった。クマは何か思い詰めたような顔をしていた。怒りの感情も顔から見え隠れしていた。

クマはどうとう、その場に立ち止まってしまった。二頭のインパラと目が合うと、睨むような目つきをした。ドールとサトラーは、クマに何か話しかけた方が良くのかわからずその場でじっとした。

荷台と取っ手との隙間に立つクマの腹回りは、ドールと初めて会った時よりもへこんでいた。クマはインパラの国に着くまで、そしてついた後からも何も口にしていない。クマはずっと空腹であるのだ。

しばしの沈黙の後、クマは睨んだような目つきのまま口を開けた。

「クマの国もずっと食糧難だった。外国から全然肉が入ってこなかった。来たとしても家来にはいつも最後に配られた。……だから食べたんだよ。よく話す後輩だったけど、致し方なかった。それで国を追われ、今は獲物を探す旅に出ている。」

二頭のインパラは理解に苦しんだ。クマの言葉は冗談なのか、はたまた真実なのか。でも、様子を見る限り真実のような気がしてならなかった。クマは固まる二頭をじっと見つめながら話を続けた。

「インパラの国に来たのも、目的は同じだ。だが私は初めて思いとどまろうとした。湖へ水を届けて帰ろうとした時だ。いつもは警備を手薄にする用意をしてから獲物を頂く。今回もさっさと宮殿を出るはずだった。そんなときにお礼の品をもらった。胸が苦しくなったんだ……。」

ドールは今となって、このクマを国に入れる前に入国許可証があるかどうか聞くべきだったと後悔した。サトラーの体は少しずつ震え始めている。

「でもお前らは自制をしてきた俺を言葉で挑発した。不審者、食肉……。」

ドールとサトラーは、クマの言葉が自分の思っている意味とは違うことだと信じたかった。願わくは今話したことが全て嘘だったとクマに言っただけ欲しかった。だがクマは次に恐ろしい一言を放つのである。

「空腹の限界だ。」

ドールは己の角を意識しながらこう言った。

「何を言っているんですか。もうあと少しで出口に着きますよ。」

その問いかけにも関わらず、クマは真つすぐ前を向きながら、

「いつもは目立たないところで空腹を満たすが、今は皆家に引きこもっているんだろう。」

と言い、静かに荷車から手を離れた。サトラーは声を震わせながら、こう言った。

「お礼の品は肉ですよ。それを食べたかどうかです。」

感情が先走っているクマには空腹も相まって誰かの言葉で行動を変えられる余地など残されていなかった。

「あっ、水の使者さま！ドール先輩を見ませんで

したか。」

ゴーグルをつけたインパラはクマに向って尋ねたが、クマは黙々と歩みを進め、そのままインパラの国から出て行ってしまった。どこか生臭い匂いがゴーグルをつけるインパラの鼻に伝わってきた。

それからすぐにクマの姿は見えなくなってしまう。荷台から垂れていたホースは、国境から西の方角へと伸びていった。その先にはクマの国がある。ゴーグルをつけたインパラはふと、水の使者が自分の国に帰っていったのだと思った。

【読売新聞社賞】

ラッキーとぼく

大分県立玖珠美山高等学校 1年

しみず よしあ
清水 由愛

ラッキー、君と出会ったのは僕が生まれた日。まだ寝返りも打てない赤ちゃんの僕のそばにずっといてくれた。寝るときは枕になってくれたりもしたんだ。

僕はやっとハイハイができるようになった。でもまだ立って歩くことはできなくて、散歩のときは、お父さんにおんぶ紐で抱っこされていた。僕は早く君と一緒に歩きたかった。

僕が最初に喋った言葉は、ママでも、パパでもなく、「わん」だったらしい。

少し大きくなって、初めて君がゴールデンレト

リバーっていう犬だと知ったよ。いつか散歩をしているときに、四葉のクローバーを見つけたんだ。そのときから君の名前はラッキーになった。

僕はもうひとりで歩けるようになった。初めてリードを握って、お父さんとお母さんと一緒に散歩に行ったんだ。あの時、君は僕より小さかったけど、僕よりすごく力が強かった。

幼稚園には、毎日欠かさずバスのお見送りとお迎えに来てくれたね。みんな僕のことを羨ましくて言うんだ。僕は少し鼻を高くして、

「いいだろう！」

と言った。

僕は小学生になった。君と過ごす時間はあつという間に過ぎてしまうんだ。入学式の写真には君はいないけど、お家に帰ってたくさん一緒に写真を撮ったね。

学校から帰ったら散歩に行くんだ。もう、お父

さんやお母さんとは一緒に行かない、二人だけで行く散歩。正直、うんちを拾うのは臭いしいやだった。だけど、二人だけで行く散歩は、いろんな景色を知れて最高に楽しかった。

学校にも慣れてきた頃、友だちと遊ぶことになった。僕は一人で行こうとしたんだ。だけど君は「ぼくも連れて行って？」というような目で僕を見てくるものだから、いつも一緒に公園に行ってみんなと遊んだんだ。みんな遊びより、ラッキーに興味津々で、遊ぶのもラッキーと追っかけっぱかりしていた。本当はサッカーをするはずだったけどね。

ある年、僕は仲の良かった友だちと喧嘩をしてしまった。多分、しょうもないことだったと思う。でもそのときはとても悔しくて悲しくてたくさん泣いた。君はそっと、床にしゃがんでうずくまっている僕の隣に座って、頭を僕の腕に当ててき

て「きゅう…」と言った。きっと泣いている僕を見て慰めてくれようとしたんだろう。あのときの君はすぐくあったかくて、僕の涙はすぐ乾いてしまった。こんな日々を過ごしていつの間にか僕は6年生になっていた。君もずいぶん大きくなったね。

中学3年生の十月頃、僕は勉強が忙しくてなかなか君と遊ぶことができなかった。僕が、

「最近構ってやれなくてごめんな」

と言うと、君は、

「ぼくのことはいいから！」

というような顔をして、机の上にあったシャーペンを鼻で突いて僕の方に転がした。僕は無事、高校受験に合格した。

「やったぞラッキー！俺、合格したぜ！」

と僕が言うと、君も走って跳びはねて嬉しそうにしてくれた。僕はそれがすごく嬉しかったんだ。

ある日、散歩をしているときに向こうから、同年くらいの子がこっちに向って走って来ているのが見えた。だんだん僕に近付いてきて、「あの！白い小さめの犬、見ませんでしたか？」彼女は息を切らして言った。どうやら散歩していたときにリードが外れてしまったらしく、犬を連れて僕を見て一緒に探してくれるかもしれないと思ったそう。僕は、彼女の犬と一緒に探すことになった。辺りが暗くなってきた頃、ラッキーが大きな声で吠え出したんだ。夜だったのもあって僕は、

「静かにするんだ！」

と少し怒るように言った。すると、吠えて伝えるのを諦めたのか君はいきなり走り出して、リードをつかんでいる僕を思いっきり引っ張っていた。走った先には、あの子が言っていた、小さくて白い犬がいた。

「ラッキー！よくやったえらいぞ！」

僕はそう言って君を思いっきり抱きしめた。すると、彼女も走ってきた。彼女は、その小さくて白い犬を抱き抱えて僕に言った、

「見つけてくれて本当にありがとう。」

彼女の目には涙が滲んでいた。その後しゃがんでラッキーにも言った。

「見つけてくれてありがとうね。」

そう言ってラッキーを撫でる彼女に僕は恋をしたんだ。たまたま帰り道が途中まで同じだったから、少し話をしながら歩いた。分かれ道に近づく頃、もしかしたらもう会えないかもしれないと思って、勇気を出して彼女に言った。

「また会えないかな。」

「いいよ、場所はどこにする？」

「そうだな、今日会ったことか。」

「オッケー！じゃあまたね。」

彼女はニコツとして言った。僕は少しカッコつけて、

「おう、待ってる。」

そう言つて僕たちは別れた。その日の夜は、あの時嬉しさをうまく隠せただろうか、変なこと言つてないよな、なんてことばかり考えてなかなか眠れなかった。それから彼女とは、何度も一緒に散歩をするようになったんだ。ついには手を繋いで歩くような関係にもなつていた。あのとき、君と一緒にいなかったら、彼女と出会うこともなかったかもしれないね。

僕が大学生になったとき、一人暮らしをするこゝとになった。その時君はもう、すっかりおじいちゃんになつていた。散歩にも最近では行かなくなつて、家でもじつとしてゐる。前はお腹が空くと「わんわん！」と僕のことを呼んでいたのに、今はお皿の前で座つて僕が気づくのを待っている。家も

静かになつたよ。僕が一人暮らしをする家はペツトを飼えない。だから君を連れていくことはできなかった。トラックに荷物を詰め、車に乗つて家を出ようとしたとき、家の中からラッキーの吠える声がした。久しぶりに聞いた君の声、僕は急いで車から降りて家の中に駆け込んだ。すると、玄関の前で君が倒れていた。

「まさか見送りにここまで歩いてきたのか？」

僕はそう言つて、ラッキーが口に何か咥えているのに気づく。生れたばかりの僕と小さなラッキーが写っている写真だ。これを届けようとしてたんだ。僕は涙が止まらなかつた。君は涎を垂らしてぐったりしている。もう歳なのはわかつていたけど、すごく悲しかった。君の息はだんだん荒くなつていく。

「ラッキー、ラッキー、いかないでくれよ。」

そういう僕を見て、君は目を瞑つた。

あれから十年が経った今、僕には新しい家族がいる。毎日、お母さんと子どもたちを連れて散歩に行くんだ。

「ここは父さんが子どもの頃飼っていた犬と、よく散歩に來た所なんだよ。」

なんて言いながら僕は、君と一緒に歩いたこと、一緒に過ごした日々を思い出すんだ。空を見ると、なんだか君が上から僕たちを見守ってくれているような気がする。僕が赤ちゃんだったときのよう。あのときから君はずっとそばで僕のことを見守ってくれていた。そして君は、君の一生をかけて、僕に命の偉大さを教えてくれたんだ。

また空を見上げて、僕は君にありがとうを言う。

第6回久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール募集要項

募集内容 創作童話 オリジナル作品

募集対象 小学生から高校生（18歳未満）

（ただし、締切日においての学年）

受付期間 令和5年9月1日（金）

令和6年1月31日（水）

発表 令和6年6月19日（水）

記念館ホームページ上で公表

表彰式 令和6年6月下旬

久留島武彦記念館

入賞 小学生、中学生、高校生の部

・大賞（各1編）・佳作（各2編）

・選考委員特別賞・久留島武彦

記念館館長特別賞（該当の場合のみ）

・読売新聞社賞

その他 ・入選作品の著作権は、久留島武彦記念館に帰属される。

・応募原稿用紙は返却しません。

応募方法

・小学生の部 400字詰め

原稿用紙3枚以上 10枚以内

・中学生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上 30枚以内

・高校生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上 30枚以内

① 作品は、手書きによること。

② 原稿用紙の右側をホッチキス

などで固定してから提出してください。

③ 表紙にはタイトルと名前、学

校、学年（年齢）、枚数を記入

し、作品にはページ番号を記

入してください。

応募先

〒879-4404 大分県玖珠郡

玖珠町大字森855番地

久留島武彦記念館

TEL 0973-73-9200

《第一次選考委員》

久留島武彦記念館 副館長 柳井田博隆
久留島武彦記念館 研究員 高石元子

《最終選考委員》

絵本作家 いしいつとむ
子どもの未来社 編集長 堀切リエ
有限会社 花書院 絵本専門士 柴田香
玖珠町教育委員会 教育長 梶原敏明
久留島武彦記念館 館長 金成妍

第5回 久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

二〇二三年六月二十七日 発行

編集 久留島武彦記念館

〒八七九―四四〇四

大分県玖珠郡玖珠町大字森八五番地

電話 〇九七三―七三―九二〇〇

FAX 〇九七三―七三―九二〇一

発行 いづみ印刷 株式会社

〒八七〇―一一一七

大分県大分市高江西一丁目四三三―二五

※本書の無断転載・複製を禁じます。

※作品集の編纂にあたり、応募作品の、①誤字・脱字、②ひらがなを漢字へ変換、③不適切な言い回し等は適宜、修正させていただきました。

くるしま童話名作選

『くるしま童話名作選』は、久留島先生の没後50年を記念して大分県玖珠町「久留島武彦」顕彰記念事業実行委員会より2010年度から企画出版され、くるしま童話を現代によりみがえらせ、多くの子どもたちに届け続けています。

現代の子どもたちが楽しめるように言葉や見開き、読み聞かせた時の耳から聞こえる語感にこだわり、画家も日本の絵本画家を代表する方をお願いして作画していただきました。



『ともがき』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『子どもいのり』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『ゆめうりふくろう』

作 久留島 武彦
絵 遠山 繁年



『トラの子ウーちゃん』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『すずむし』

作 久留島 武彦
絵 黒井 健



『ツバメのおながえし』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『月宮殿のおつかい』

作 久留島 武彦
絵 アヤ井 アキコ



『海に光るつぼ』

作 久留島 武彦
絵 ゴトウノリユキ



『弾きがえる』

作 久留島 武彦
絵 市居 みか



『なだれうさぎ』

作 久留島 武彦
絵 いしいつとむ

『くるしま童話名作選』は、久留島武彦記念館および全国の書店で購入することができます。
※店頭がない場合は、注文の上ご購入下さい。

各作品 定価：1,300 円＋税